



津久井湖城山公園ガイドブック

津久井城ものがたり

過去から未来へ

津久井湖城山公園ガイドブック

津久井城ものがたり



津久井城縄張図



- 小網 (P30)
- 本城曲輪 (P20,44)
- 太鼓曲輪と家老屋敷 (P22)
- 飯縄曲輪 (P24)
- 馬場東縦堀 (P50)
- 城坂曲輪群南 (P64)
- 荒久 (P30,62)
- 小倉・馬込 (P30,66)
- 大手道 (P28)
- 御屋敷 (P26,52)
- おじんや (P60)
- しんでん・御屋敷南側虎口 (P58)



発刊にあたって

津久井城についての最初の学術調査は、1960年の赤星直忠博士による城山ダム建設に伴うものでした。その後、津久井城のあった城山一帯の公園整備に先立ち、1995年から城山全域の遺構分布状況や伝承地名の調査が始まりました。また専門家と学生、小中学生らが参加し、御屋敷跡からはじまった発掘調査は、その後山麓から山頂におよび、現在は、相模原市の市民協働調査へと引き継がれています。その結果、津久井城の全体像は少しずつ明らかになってきています。

津久井城はどんなお城だったの？ お城の復元はできないの？ そんな問いへの答えと夢を実現する手助けとするため、これまでの調査などをもとに、津久井城の歴史から構造、発掘調査の結果を解説し、更に公園としての津久井城の整備をどのように考えているのかをこのガイドブックにまとめました。ぜひ、このガイドブックを携えて現地と重ね合わせ、その大いなる時の流れと津久井城の往時の姿に思いを馳せ、想像の翼を無限に広げてください。そして「宝ヶ峰」の未来予想図を一緒に考えてください。

「いざ、我らが津久井城へ。我らの城山に。」

そして、永久に愛される、あなたの公園を。」

相州津久井城主 内藤左近将監綱秀

目次

はじめに

- ・ようこそ津久井湖城山公園へ …… 2
- ・津久井城の概要 …… 3

1. 津久井城について

- ・中世津久井と津久井城 …… 4
- ・津久井城の築城と内藤氏 …… 6
- ・後北条氏と支配体制 …… 8
- ・津久井衆 …… 10
- 閑話：三増合戦について …… 12

2. 城山を歩く

- ・足元に眠る歴史 …… 16
- ・津久井城見取図 …… 18
- ・詰城部・本城曲輪群 …… 20
- ・太鼓曲輪と家老屋敷 …… 22
- ・飯縄曲輪群 …… 24
- ・根小屋部 御屋敷周辺 …… 26
- ・大手道を登る …… 28
- ・荒久および小倉・馬込、小網 …… 30
- 閑話：描かれた津久井城 …… 32

3. 津久井城、その後

- ・戦国から徳川の時代へ …… 34
- ・地域との関わりのお話 …… 36

4. 津久井城を公園にする！

- ・津久井城スタイル …… 38
- ・文化財としての津久井城への関わり方 …… 40

5. 津久井城を掘り起こす

- ・伝承は本当だった！ …… 42
- ・本城曲輪群 …… 44
- ・馬場東の竪堀 …… 50
- ・御屋敷 …… 52
- ・しんでん 御屋敷南側虎口 …… 58
- ・おじんや 陣屋の遺構 …… 60
- ・荒久地区 …… 62
- ・城坂曲輪群南地点 …… 64
- ・小倉・馬込地区 …… 66
- ・津久井城の出土遺物 …… 68
- 閑話：市民とともに …… 72

6. 津久井城と風景

- ・山城と樹木 …… 74
- ・津久井城と眺望 …… 76
- ・シンボル津久井城＝親しまれる風景 …… 78
- ・山城と水 …… 80
- ・土地の履歴書 …… 82

7. 未来へ向けて

- ・津久井城の整備を考える …… 84
- ・パークセンターの紹介 …… 88
- ・津久井城関連年表 …… 90
- ・主な参考文献、協力、提供 …… 91

はじめに

ようこそ津久井湖城山公園へ

富士山麓の山中湖や忍野八海を源とする相模川が、山あいを抜け、平野に向けて流れ出そうとするその場所に、津久井湖と標高375mの「城山」があります。この城山を中心とした公園が県立津久井湖城山公園です。

その昔「宝ヶ峰」とも呼ばれたこの山は、はじめて見る人には周囲と同じ何の変哲もない山に見えるかもしれません。しかし、今から500年前、この山は「津久井城（築井城）」と呼ばれる山城でした。江戸時代の初頭には陣屋（代官所）が置かれ、陣屋の廃止後は御林（幕府直轄林）として、あるいは畑として、麓に暮らす人々の生活を支える里山としての歴史を刻んできました。何でも無い山に見える城山は、実は津久井の人々の数百年にわたる営みが刻みこまれた、まさに「宝の山＝宝ヶ峰」なのです。

都市近郊の緑や城跡をはじめとする文化財の多くは、戦後の都市化の波にさらされ、残念ながら失われてしまったものも少なくありません。しかし、先祖代々その心の中にかげがえのないものとして刻み込まれた城山は、地域の皆さんの熱意と努力により今日まで守られてきました。そして、この津久井城に象徴される「宝ヶ峰」の素晴らしさを、より多くの皆さんと分かち合い、後世に伝えたい、という地域の皆さんからの要請を受けた神奈川県は、この歴史的な価値を包み込んで広がる里山を、より多くの皆さんが将来に渡って親しめる場とするため、都市公園として、整備・活用していくことにしました。

公園づくりに当たっては、地元の市民や専門家の皆さんとの意見交換を定期的に行い、また、その初期段階から幼稚園・保育園の子どもたちによる花植えや小中学生向けの発掘体験、畑づくりや公園収穫感謝祭などを行い、幅広く世代を超えて愛される公園づくりを意識しながら地域に寄り添い、時間をかけて進めてきました。そして、公園整備の着手から20年が経過した現在、年間40万人を超える皆さんに來園していただけるまでになりました。



～ 500年ぶりに烽火が上がる～ 収穫感謝祭にて（パークセンター前）

津久井城の概要

津久井城は自然の地形を巧みに利用して築かれた山城です。『新編相模国風土記稿』などの文献によると、城が築かれたのは鎌倉時代とされていますが、これまでの調査では、現在見られる遺構は、戦国時代（16世紀）に使用されていたものと考えられています。

16世紀の関東は北条早雲（伊勢宗瑞）や武田信玄、上杉謙信といった戦国大名が覇権を争っていた時代です。当時の津久井地域は小田原に本拠を構えた後北条氏の勢力下であり、津久井領主であった内藤氏（津久井城主）は、領主としての独立性は持ちつつ、後北条氏の領国支配を担う重臣でもありました。津久井城は小田原城を本城とした後北条氏の支城として甲斐の武田氏との領国の境目を守り、また津久井地域の統治の拠点となる支城として、重要な役割を担っていました。更に近年の調査でたくさんの遺構が発見され、これまで考えられていた以上に、堅固な要塞であることが分かってきました。

1. 津久井城について

中世津久井と津久井城

交通・経済・軍事の要衝

津久井城は、北方に武蔵国、西方に甲斐国に接する相模国の西北部に位置しています。そして、八王子方面から南下して厚木・伊勢原を経て東海道を至る八王子道と、江戸方面から多摩丘陵を通り、津久井を東西に横断して与瀬（相模湖地区）・吉野（藤野地区）付近で甲州街道に達する津久井往還、また眼下には古来重要な水運のルートであった相模川が流れていることなどから、地理的要衝の地であることがわかります。

また津久井地域はその豊かな山林資源から、鎌倉時代後期には北条得宗家（鎌倉幕府の北条氏愼領の家系）の直接支配下に置かれ、南北朝期以降は足利将軍家代々の直轄領である御料所（将軍家領）となっていたことが分かっており、中世の早い時期から経済的、また軍事的にも重要な地域として認識されていました。

*歴史上、「津久井」の地名が登場するのは1411年の『真覚寺観音堂棟札』ですが、当時は「奥三保」（おくさんぼう、あるいはおくみほ）と呼ばれていました。

鎌倉府と関東管領上杉氏

1349年、室町幕府将軍足利尊氏は東国の統治のための鎌倉府を置き、足

利基氏を鎌倉公方（長官）に、上杉憲顕を関東管領職に任じ後見にしました。鎌倉府は関東の豪族たちに支えられ、また与えられた権限も大きかったため、しばしば幕府と対立し、それは幕府により任命された補佐役である関東管領上杉家との対立にもつながりました。

鎌倉公方第4代足利持氏は幕府方と対立、調停に腐心した管領上杉憲実とも対立し合戦におよび、持氏は自刃しますが、その子成氏が鎌倉公方となりますが、上杉氏や今川氏らとの対立が続き下総国古河城（古河市）に拠点を移し、古河公方となります。また新たに鎌倉公方として派遣された足利政知は騒乱から鎌倉に入らず、伊豆国堀越（伊豆の国市）に御所を置き、堀越公方となりました。この古河公方と幕府・堀越公方・関東管領上杉家との対立に在り地武士が連動し、15世紀後半、関東地方を二分した争いが続けられました。

上杉氏は代々関東管領職として守護及び地頭の管理に当たり、政務を執り仕切る一方で、関東一円の軍事などを掌握しました。管領職を世襲した山内上杉家は上野・武蔵・伊豆を中心に勢力を誇り、分流の扇谷上杉家は相模（伊勢原市糟屋）に拠点を置き、相模国守護を務めていたとされます。

奥三保と長尾景春の乱

戦乱が続く中、山内上杉家の重臣長尾家の一族景春が家督相続をめぐる叛乱を起こします。相模北部の在り地武士団の本間氏や海老名氏、金子氏、溝呂木氏らは景春に味方し蜂起しました。

この乱を鎮めるため扇谷上杉家の重臣太田道灌は相模から上野・武蔵の武士団を動員し景春勢を鎮圧します。相模では景春と党の小沢（愛川町）、溝呂木（厚木市）、小磯（大磯町）の城を攻め落としています。また道灌の弟の資忠が率いる軍勢が奥三保に陣取った本間氏、海老名氏、甲州住人の加藤氏と戦い、これを撃退したという記録があります（『鎌倉大草子』、『太田道灌状』）。その後、幕府と古河公方との和睦が成立しますが、山内・扇谷上杉両家の関係は微妙になっていたようです。

北条早雲の登場と「津久井山」

早雲は今川氏の下で興国寺城（沼津市）の城主となり、堀越公方を追い、韮山城（伊豆の国市）を築き伊豆国を支配するようになります。その後、山内・扇谷両上杉家の抗争の間隙をついて、1495年に扇谷家と対立していた大森氏の居城・小田原城を奪取しました。引き続き上杉方の岡崎城（平塚市、伊勢原市）および新井城（三浦市）を落とし

て、1516年頃までには、ほぼ相模一国を掌握しました。

この時に反上杉氏の立場に立った長尾景春らと吉里一族が「津久井山」に拠り早雲に味方して戦ったこと（1510年『上杉顕定書状写』）、また扇谷上杉朝良と三浦義同が「津久井山」を攻めた記録（『三浦系図伝』）があります。

『上杉顕定書状』1510年

◆原典『歴代古案・三』所収文書
津久井町史資料編 所収

伊玄相背キ、帯刀左衛門尉・吉里一類津久井山ニ移り候、宗瑞ニ一味候哉

山内上杉顕定が家臣長尾景長に宛てた書状で、伊玄（長尾景春）と（長尾）帯刀左衛門尉、吉里一族が津久井山に移り、宗瑞（北条早雲）に味方して戦っていることを伝えています。

この津久井山が津久井城だとすると、このころまでには現在の地に城か砦が築かれていたものと思われます。

後北条氏と支配体制

後北条氏と領土拡大

後北条氏は、戦国時代に関東一円を支配した戦国大名です。鎌倉幕府執権職の北条氏とは別の氏族で、現在ではそれと区別するために「後北条氏」または「小田原北条氏」と呼んでいます。伊豆から進出して、小田原に本拠を構えた北条早雲（伊勢宗瑞）が後北条氏の祖ですが、実際に北条姓を名乗ったのは二代の氏綱からです。後北条氏は早雲、氏綱、氏康、氏政、氏直の五代、約100年にわたって小田原城を本拠地として関東の大部分を治めました。

早雲は1495年に小田原城を奪取した後、支配を拡大し、1516年には三浦氏を滅ぼし相模全域を手中にしました。後北条氏はその後、支配を広げ、その最大領地は伊豆・相模・武蔵・下総・上野に加え安房の里見氏と同盟、下野・駿河・常陸の一部と、非常に広大なものでした。

支城制

戦国大名は領土を守るため、いたるところに支城を置き統治していました。広大な領土内ではスムーズな連絡体制、兵の移動は大きな課題です。そこで「支城制」と呼ばれる支城を結ぶネットワークができました。支城には情報連絡用の「伝えの城」、兵移動、駐屯

用の「つなぎの城」、敵国との最前線である「^{さかいめ}境目の城」などがあります。津久井城は、甲斐の武田氏などに対する境目の城として最前線にあっただけでなく、田代城や細野城といった城や、多くの烽火台を束ねる有力な支城でもありました。

一族と他国衆の活用

後北条氏は、本拠地である小田原城から支配を拡大していきました。そして重要な支城には北条氏照や氏邦といった一族を城主として置き、また各地の国人（有力な土豪）らを取り立てて城を任せるとともに、家臣団として組織し、支城を中心とした支配体制を築いていきました。津久井城主内藤氏もそのうちの一人で、内藤氏を中心に「津久井衆」が組織されていました。

貫高制と軍役

戦国大名は家臣に対して貫高（^{かんだか}知行地から得られる収入）を給与し、家臣はその給与に対し、軍役などを負担することが義務付けられていました。後北条氏は他の大名に先駆けて検地を行い、貫高制のもとで家臣を小田原衆、津久井衆、玉縄衆というように、本城、支城単位に組織化し、主従関係の強化や中央集権化を図りました。

後北条氏領地変遷図



津久井衆

津久井衆

1559年に北条氏康の指示により『小田原衆所領役帳』(以下、『所領役帳』)が作られました。『所領役帳』とは家臣の知行高を調べ、所領役、つまり軍役や普請役(労役)、出銭(費用の拠出)などを賦課する際の基本となる台帳のようなもので、各衆別(小田原衆、御馬廻衆、玉縄衆、江戸衆、松山衆、伊豆衆、津久井衆など)の家臣個々の知行地とその貫高(所領高)、更に軍役として動員すべき人数などが記載されています。

津久井衆の項には津久井城主内藤左近将監を筆頭に内藤兵部少輔、井上加賀守の重臣らしき名前が書かれ、あとは村ごとに貫高と家来衆の名前が記されています。ほとんどが10貫文に満たず知行割もないことから、津久井在来の小土豪が内藤氏に従ったものと考えられています。

貫高

土地面積を銭貨(貫文単位)により表示したもので、後北条氏の領国では、田は1反(1000m)当たり500文、畑は150~200文とされていました。

『小田原衆所領役帳』にみる津久井衆と知行役高・知行村

姓名	知行役高	知行村名
内藤左近将監	1002貫	808文
内藤兵部少輔	100貫	500文
井上加賀守	65貫	750文
野口遠江守	55貫	
井上主計助	53貫	
矢部修理亮	40貫	
守屋若狭守	34貫	950文
野呂左京亮	16貫	627文
井上左京亮	16貫	
小嶋新右衛門	14貫	
井上雅楽助	12貫	750文
井上全助	12貫	750文
守屋雅楽助	12貫	300文
守屋四郎左衛門		
文入兵庫助	11貫	
金子新五郎	10貫	
大塚図書助	8貫	
井上帯刀左衛門	7貫	500文
石井五郎左衛門	7貫	200文
守屋大炊助	7貫	
石井助次郎	6貫	270文
石井藤左衛門	6貫	270文
尾崎掃部助	6貫	200文
井上左京進	6貫	130文
石井四郎太郎	5貫	500文
井上隼人佑	5貫	500文
守屋縫殿助	5貫	500文
中村隼人佑	4貫	532文
山口大炊助	4貫	250文
井上甚三郎	4貫	200文
石井源左衛門	4貫	
山口雅楽助	3貫	870文
中村帯刀左衛門	3貫	332文
井上孫右衛門	3貫	
井上源五	3貫	
井上三郎左衛門	3貫	
守屋雅楽助	3貫	
守屋四郎左衛門	2貫	800文
野呂中納言	2貫	600文
井上源七	2貫	
大塚四郎左衛門	2貫	
山口侍者	2貫	
彦右衛門	1貫	700文
三富	1貫	672文
鈴木	1貫	600文
井上五郎左衛門		700文

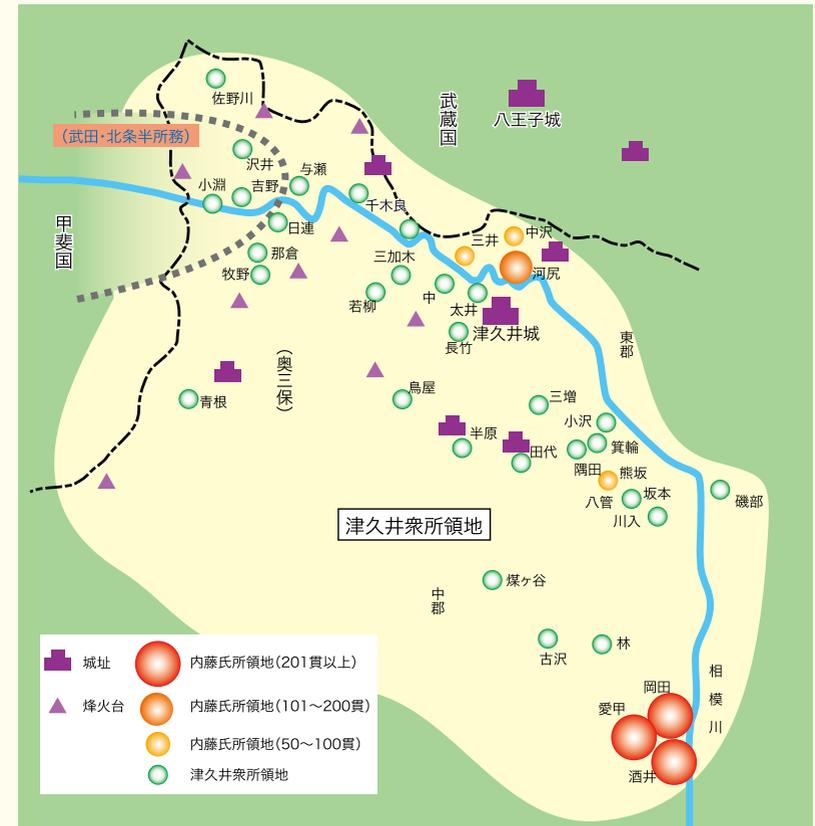
敵知行半所務とは

『所領役帳』には、甲斐の武田方と接する一部の地域に「敵知行半所務」(吉野村・沢井村・小淵之村)、「是モ半所務」(日連之村・那倉之村)と記されています。これらの村々は、後北条氏と武田氏の領主に半分ずつ年貢を納めることで紛争を回避していたと考えられ「半手」とも呼ばれます。

一帯が権力関係の入り組んでいた地域であり、その他にも「八カ村内ニテ小山田所務分」と武田家重臣の小山田氏が所務する土地があるなど、複雑な領有関係があったことが想像されます。

このような領国の境目特有の微妙な状況下で編成されていたのが津久井衆であり、津久井城主内藤氏がそれを統括していました。

『所領役帳』による津久井衆所領



閑話

みませ 三増合戦について

津久井城の南方約3kmに三増峠があります。この一帯を舞台に繰り広げられたのが三増峠の合戦です。

1568年、武田信玄は今川氏真との同盟関係を破棄します。駿河に侵攻した甲斐・武田信玄に対し、北条氏康は今川家を支援し信玄と対峙する状況となりました。翌1569年10月、信玄は2万の軍勢を連れ上野から関東を南下、鉢形城・滝山城を攻め小田原城を包囲しました。しかし無理な城攻めは行わず、城下に火を放ち、相模川沿いに三増峠を越えて甲斐に戻る進路を取りました。これに対し、小田原城の北条氏康・氏政父子は追撃、息子の氏照

(滝山城主)と氏邦(鉢形城主)ら2万の軍勢を三増峠に向かわせ、待ち伏せして挟み撃ちとする体制をとりました。信玄は自ら三増峠の麓に陣を張り、そこに北条軍が攻めかけ激戦となりましたが、結果は北条氏康、氏政父子の軍勢が到着する前に、逆に山県昌景隊との挟み撃ちにあい北条軍は総崩れとなり、武田方が勝利、両軍の死者は4000人を超えたとされます。

『甲陽軍鑑』によると、信玄は小幡重貞軍を長竹村の「囲い沢(隠し沢)」に配置し、津久井城を牽制しました。内藤氏と津久井衆は津久井城に釘付けとなり出撃できなかったようです。



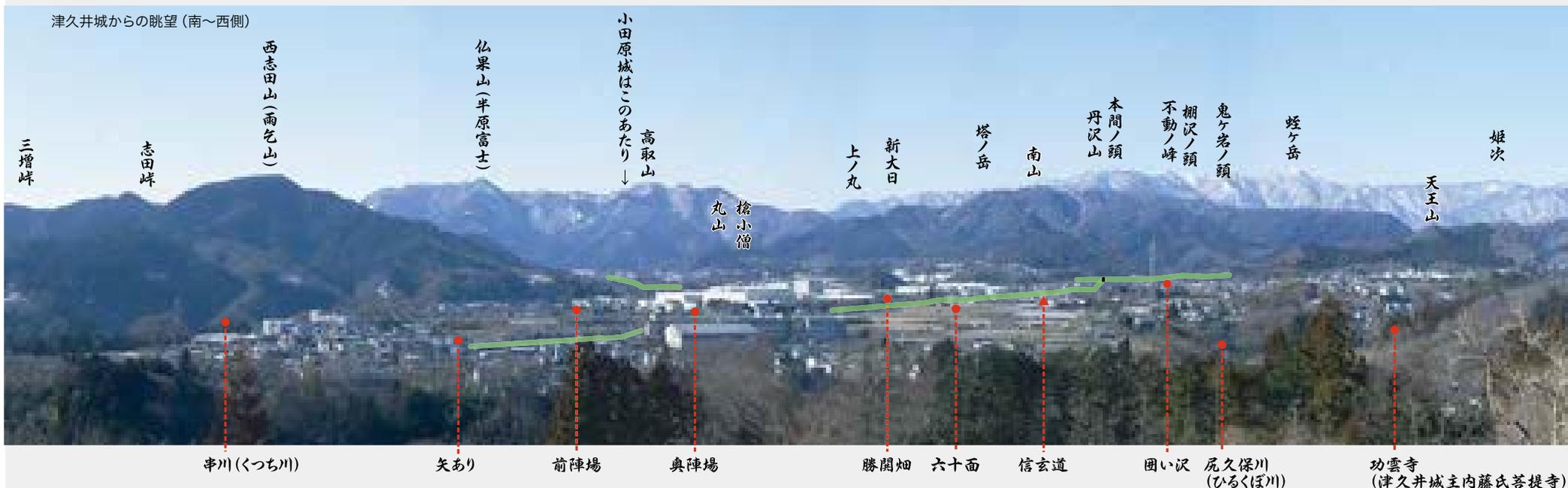
伝承マップ

※地図は国土地理院発行の1/50000地形図(八王子・上野原 2007発行)を使用

合戦の伝承

山麓の三増や葦尾根では、以前は耕作中に鎧冑の破片や人骨などが見つかったということです。現地には戦さに

ちなむ地名や伝承が残され、激しかったであろう合戦を今に伝えています。また、毎年秋には三増合戦祭りも開催されています。



三増合戦絵図について

右の図は三増合戦の絵図です。江戸時代に描かれたものですが、数多くの絵図が大名家に伝わり残されています。歴史上に名を残す合戦が多いなかで、わずか1日で終わった山岳戦が今に伝わっている理由の一つとして、江戸時代には甲斐武田氏の軍学が主流であったことが挙げられます。講義用に模写・使用されたものと考えられています。

三増合戦の絵図は複数ありますが、

絵図中には三増山中の両者の陣立てに加えて「津久井城」、「囲い沢（隠し沢）」など、戦さのポイントとなる要素も書き込まれています。合戦の際に津久井城の城兵はなぜ出陣しなかったのか？ そんなことを講義していたのかもしれませんが。

右の絵図では津久井城に4層の建物がそびえています。もちろん史実ではありません。



■三増合戦の伝承

・信玄道

武田軍が利用されたとされる古道を「信玄道」と呼んでいます。武田軍に皮肉をこめて「信玄逃げ道」とも呼ばれます。

・槍小僧（石ヶ沢）

津久井城牽制のため武田方が槍を持った人形を並べたと伝えられます。

・いやが坂とそわずが森（葎尾根）

信玄は戦さの足手まといになると従っていた女人を殺したそうです。その場所を「いやが坂」、また女人が葬られた場所を「そわずが森」と言います。

・柿沢の姓（葎尾根）

信玄が引き上げる際に立ち寄った民家で茶菓子としてさし出された柿を大いに気に入る、柿沢の姓を与えたとされます。

・梅の木平

中峠一帯を指し、信玄が戦闘の指揮中に梅を所望したところ、たわわに実ったことから梅の木平と呼ばれます。

・富士の森（富士塚 金原）

信玄は富士の見えるところで戦さをして負けたことがないとされ、三増合戦の時

に、その縁起を担ぎ、金原に富士山のかたちをした小山を築いたとされます。

・囲い沢（隠し沢） 沼

津久井城を牽制するために兵を隠したとされることから囲い沢の名称がついたとされます。

・松明がわりにされた光明寺（青山）

引き上げの際に、光明寺で松明を借りようとしたが、断られたことから、寺に火をつけ松明がわりにしたとされます。

・信玄もろこし

信玄は金原のモロコシに提灯を結びつけて城山の内藤勢を脅したそうです。重さでモロコシの首が曲がり、兵の血で茎が赤く染まったそうです。以来、牛の飼料として作る穂が赤いモロコシをシンゲンモロコシというそうです。また、信玄が鉄砲を撃とうとしたとき、邪魔なモロコシを睨んだら、モロコシがうなだれて首が曲がってしまったことから穂が大きく垂れたモロコシもシンゲンモロコシというそうです。

2. 城山を歩く

足元に眠る歴史

津久井城は自然の地形を巧みに利用して築かれた山城で、戦国時代の「根小屋式山城」の様子をよく伝えています。現在見られる遺構は後北条氏により整備されたものと考えられます。

遺構は山頂部から中腹、山裾（根小屋）とその周辺に広がり、山頂部一帯には、「本城曲輪」と「太鼓曲輪」、飯縄神社のある「飯縄曲輪」を中心に、各尾根に小規模な曲輪が放射状に連続して配置されています。さらに東に延びる尾根上には「鷹射場」と呼ばれる曲輪があります。遺構としては、曲輪、土塁、堀切、豎堀および水の手（井戸）などがあり、石積みも散見されます。

一方、根小屋部は、城山西南麓の「根本」および「城坂」、西北麓の「小網（北根小屋）」、南麓の「荒久」「西荒久」、および東南麓の「馬込」一帯に広がっていたと考えられ、根本・城坂では、御屋敷、馬場、馬屋小屋などの地名が残され、発掘調査において城主の居館跡が見つかっています。

他にも、西麓「小峰山」にも小規模の曲輪が見られ、さらにその西方、功雲寺境内およびその周辺に残る平場や北麓の大蔵寺周辺の平場も、津久井城に関連する施設遺構と考えられています。

根小屋式山城

城には築かれた場所によって、山城、丘城、平城などがありますが、独立した山や尾根上などに築かれたものが山城です。根小屋式山城とは、山麓に屋敷地を設けた山城で、戦さになれば詰城部に登ります。

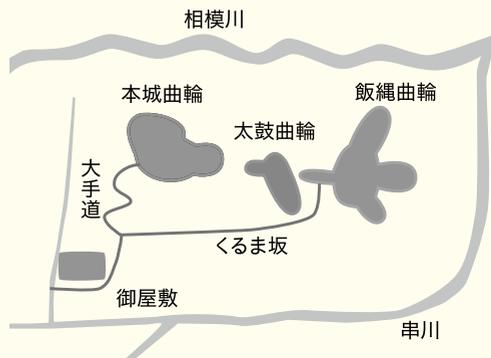
根小屋

山城は曲輪の面積が狭いために城主や家臣の屋敷などは山麓に置きました。それらの屋敷地一帯を根小屋（別に根古屋など）といいます。主に東国で用いられた語であり、後に集落地名となったところも多く、津久井城下でも「根小屋」、「北根小屋」が残ります。

相州津久井古城図

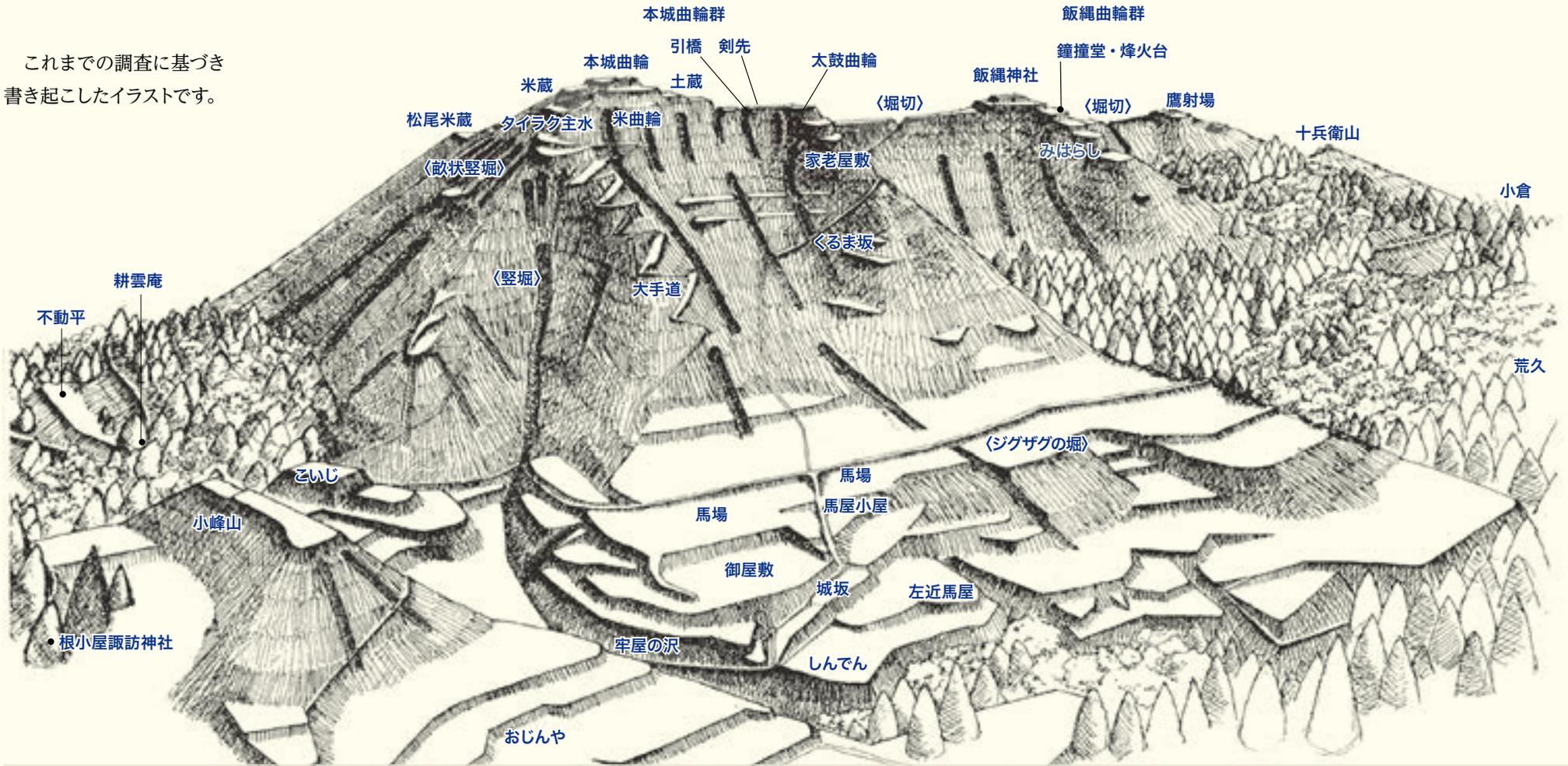
右の絵図『相州津久井古城図』（以下『古城図』）は、狛江市石井家に伝えられたもので、津久井城が落城してから約60年後の1648年に描かれたものです。城郭研究をしていた同家のご先祖様が城跡を調査し作成したと伝えられています。当時、幕府は諸藩に城郭を含んだ城下町の地図作成を命じており、その一環として廃城となった津久井城も描かれた可能性があります。

いずれにしても往時を知る貴重な資料です。



津久井城見取図

これまでの調査に基づき
書き起こしたイラストです。



城郭用語

- 曲輪(くるわ)** 郭とも書く。城や砦の区画を指し、周囲を土塁や柵で囲まれていることが多い。山城では、尾根などの傾斜地を削ったり盛り上げたりして平らな曲輪を造りだしている場合が多い。
- 土塁(どるい)** 土を幾層も突き固めたりしながら盛り上げた土手状の防御施設。

土居とも書く。

- 虎口(こぐち)** 小口とも書く。曲輪の入口。
- 大手(おおて)** 城の表口のこと。「追手(おうて)」とも書く。表口への道を大手道という。大手以外は搦手(からめて)という。
- 枳形(ますがた)** 門と門に囲まれた通路幅以上の広がりを持つ方形の空間。
- 空堀(からぼり)** 水をたたえた水堀に対し、水のない堀を空堀という。

- 堀切(ほりきり)** 尾根や台地の鞍部に敵の移動を妨げる目的で、通路を遮断するようにV字に掘られた堀。
- 豎堀(たてぼり)** 斜面の方向に沿って、縦方向に設けられた堀。横移動を防ぐほか、外敵の侵入路を限定し、城側からの攻撃をしやすくする役割も持っていた。その他にも通路や排水路としての役割を持っていた。

- 切岸(きりぎし)** 山腹の切り立った斜面をさらに削り、急峻に加工した場所。
- 縄張(なわばり)・縄張図** 曲輪や堀、門、虎口などの配置。城を築く際のグラウンドプラン。施設の配置を平面に描いたものが縄張図。
- 帯曲輪(おびぐるわ)** 細長く帯状の曲輪。

詰城部・本城曲輪群

標高375mの山頂の本城曲輪および太鼓曲輪と、飯縄神社のある東峰の飯縄曲輪とのそれぞれの主要部を中心に、各尾根に小曲輪が階段状に配置されています。稜線部には敵の動きを防ぐため3箇所堀切が、また山腹には谷筋を掘削・拡張した長大な縦堀が何本も掘られています。

本城曲輪群

本城曲輪は津久井城の中心で、戦時に城主や兵がたてこもる最後の砦です。周囲の尾根には何段もの連続する小曲輪や虎口、また麓まで続く長い縦堀が掘られるなど、とても堅固な作りになっ



※詰城部は史料では「高山」と呼ばれていました。

ています。

中央の土塁に囲まれた、狭い空間が「本城曲輪」です。その周りには、「土蔵」「米曲輪」「米蔵」「松尾米蔵」などと呼ばれる曲輪があり、戦国時代当時に、どこに何があったかを知る手がかり

本城曲輪周辺見取図



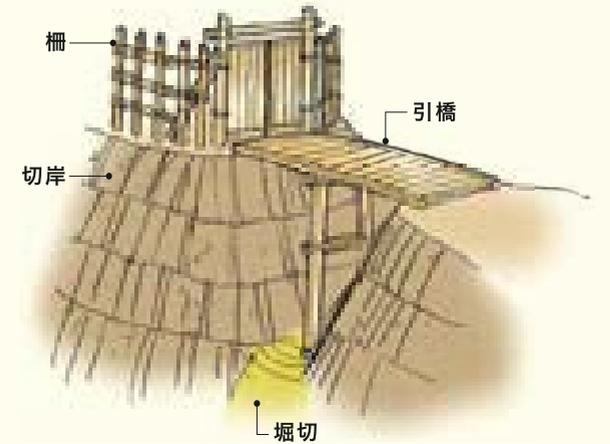
となっています。また、北東側の小さい曲輪には井戸の跡も残っています。

発掘調査の結果、「もん」と呼ばれていた場所からは曲輪への入口施設(石敷きの階段や門の基礎石)が見つかっています。

引橋(ひきはし)

本城曲輪と太鼓曲輪の間には堀切が設けられています。『古城図』には橋が描かれていることから、この場所には堀切を渡る木橋が架けられていたものと思われます。

木橋の構造は非常時には簡単に取り



壊したり、移動したりすることができるものだったと思われ、敵が攻めて来た際には橋を手前(本城曲輪側)に引いて敵を渡らせないようにしたものと考えられます。

太鼓曲輪と家老屋敷

太鼓曲輪

根小屋から城坂、くるま坂を登りつめ堀切に出て、そこから本城曲輪に向かう際に通る、しゃもじの形に削られた平場が「太鼓曲輪」です。飯縄曲輪方向に対する防御を固めていて、広がった部分は東側を土塁で囲み、斜面を急角度に削り落とし切岸としています。

太鼓曲輪の西端は「剣先」と呼ばれ、その先は堀切となり、本城曲輪へは堀切を渡って行くこととなります。現在、本城曲輪に登る道は南側につくられていますが、当時の城道は北側の急斜面を登っています。

太鼓曲輪という伝承名は陣太鼓を打ち鳴らしたことに由来するのでしょうか。山麓の功雲寺には、城主内藤氏が寄進したとされる陣太鼓が所蔵されています。

家老屋敷

太鼓曲輪の東端から細い道を降りると、家老屋敷にたどりつきます。家老屋敷は三角形の曲輪で、山の斜面を削

太鼓曲輪周辺見取図



り出して平たく造成しています。曲輪の両裾には戦国時代の石垣が残っています。家老屋敷の下方には、曲輪がさらに2段、並んで造成されています。

戦国時代の石垣



Topics

築井古城記の碑

『築井古城記』の碑は、山頂、本城曲輪の土塁上に建てられています。建立年月日は明らかではありませんが、1816(文化13)年11月28日に撰文したと記され、津久井城の築城の由来や城主内藤氏の系譜などの一説が刻まれています。建立者は根小屋村名主の島崎律直で、縁せき者である国学者小山田与清を介して、当時のそうそうたる著名人が碑の建立に関わりました。

- 題字 (築井古城記)
幕府老中として寛政の改革を行った松平定信
- 撰文 (せんぶん/原文の作成)
幕府儒官の大学頭林衡(だいがくのかみはやしたいら)。実際には門下筆頭で林家学長

の松崎謙堂とされます。

- 書 (原文を書写)
国学者で幕府奥祐筆の源弘賢。当代一の名筆家と言われた。
- 刻字
江戸時代を代表する石刻家と言われた。

この碑の大きさは、高さ150cm×幅80cm×厚さ20cmです。重さは約700kgになります。山頂まで運び上げるのは、さぞ大変だったことでしょう。ちなみに5万両の費用がかかったと伝えられていますが、現在のお金に換算すると、いったい幾らになるのでしょうか？
相模原市指定有形文化財
(歴史資料：2007年4月1日指定)



飯縄曲輪群

飯縄曲輪群について

「飯縄神社」を中心とする曲輪群で、天狗山とも呼ばれていたようです。堀切（鞍部）から「飯縄曲輪」に登るには、現在は山頂に鎮座する飯縄神社の参道・階段を登っていますが、当時の城道は空堀状になっていて、山頂の手前（西側）にある土塁の切れ目に入り、多少曲折しつつ階段の手前を大杉方向に折れ西→北→東へと回り込み到達したと思われる。

「飯縄曲輪」は、長方形の平場で、この曲輪にとりつく帯曲輪の外縁には部分的に土塁の跡が見られます。南側には

「鐘撞堂・烽火台」、「みはらし」と呼ばれる曲輪が続き、その先にも数段の平場が確認されています。

北側の曲輪には津久井城のシンボル大杉（2013年夏の落雷で焼け落ち、根元から5mが残っています）があります。樹齢900年とされていますので、内藤氏の時代には既に400年の古木だったことになります。東側最下部には宝ヶ池と呼ばれる「水の手」があり、さらにその先は飯縄曲輪と鷹射場とを隔てる堀切となっています。

0 10 20 30 40 50m



飯縄曲輪群見取図

飯縄権現

飯縄神社は「飯縄権現」を祀っています。飯縄権現は不動明王の化身で軍神として戦国武将に受け入れられていました。後北条氏は関東の飯縄権現信仰の中心地である高尾山を厚く庇護しており、津久井城でも同じように祀られたと考えられます。現在では農耕や火除け、商売繁盛などの神様として信仰されています。

宝ヶ池

宝ヶ池は、津久井城の水の手（溜井）の一つです。水は、戦さのもとより、城中の生活に欠くことのできないものです。『新編相模国風土紀稿』は「水が白く濁っていることから城兵が刀を研いだという伝説がある」と伝えています。

池は現在でも枯れることなく水をたたえています。



宝ヶ池

鐘撞堂（烽火台）

飯縄権現の南側の曲輪は、鐘撞堂とも烽火台とも伝えられています。烽火（狼煙とも書く）も鐘も、ともに当時の情報伝達手段でしたので、烽火台として使われていたのかもしれませんが。さらに南側の曲輪は「みはらし」といわれ、付近一帯の眺望が開ける場所です。

Topics 望郷の鐘（上野原の伝承）

上野原の大倉地区には「望郷の鐘」の話が伝えられています。

大倉地区の要害山には鐘撞堂と呼ばれる場所があります。この鐘は美しい音色を遠くまで伝えていたそうです。いつの戦いかは定かではありませんが、攻め入った後北条軍がこの鐘を戦利品として津久井城に持ち帰ったそうです。津久井城では合図に使うため立派な鐘撞堂を造り、試しに鐘をついたところ、その音は

「ゴーン オークラ オークラ」と誰か聞いても故郷を思い、悲しくむせび泣いているようだったのだそうです。たまりかねた城兵は、鐘を打ち砕き新しく鑄なおして叩いてみたのだそうです。そうしたところ鐘はやはり「ゴーン オークラ オークラ」と鳴るのだそうです。鐘の怨念を恐れた津久井城では、功雲寺付近にある池に鐘を沈めてしまったそうです。

（上野原町誌より）

大手道を登る

大手道について

御屋敷の北側の尾根筋に山頂まで続く坂道が大手道(表口へ続く道)です。『古城図』にも内藤左近屋敷から本城に向けて描かれています。この大手道は1987年に津久井城山を愛する会の皆さ

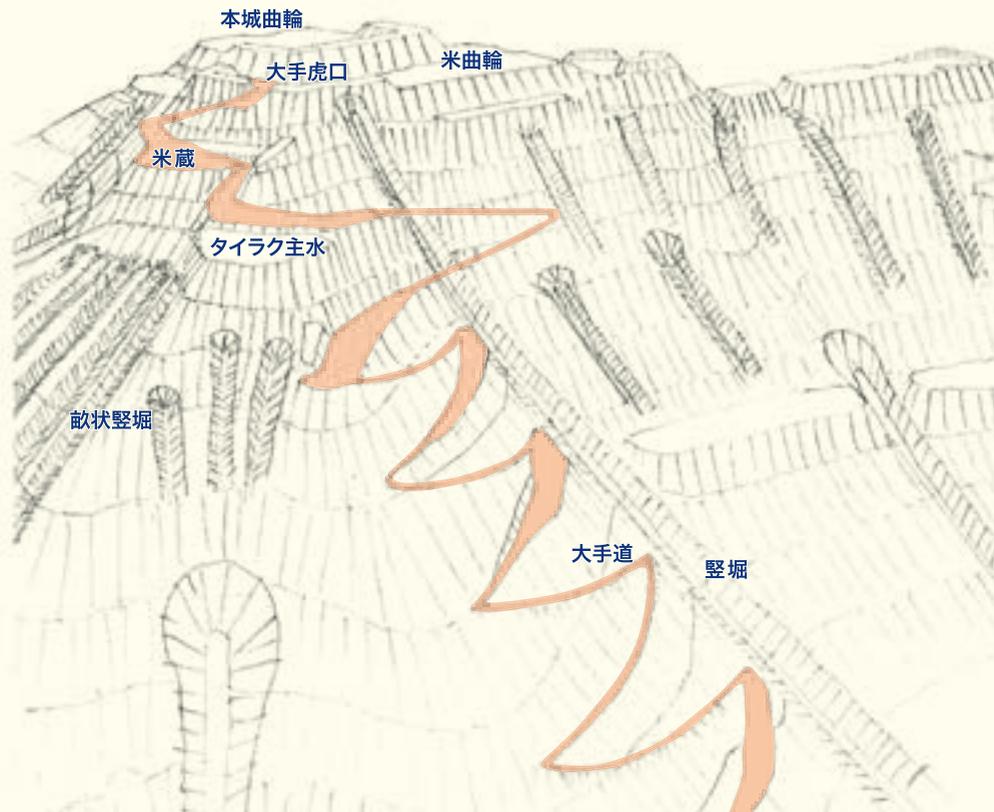
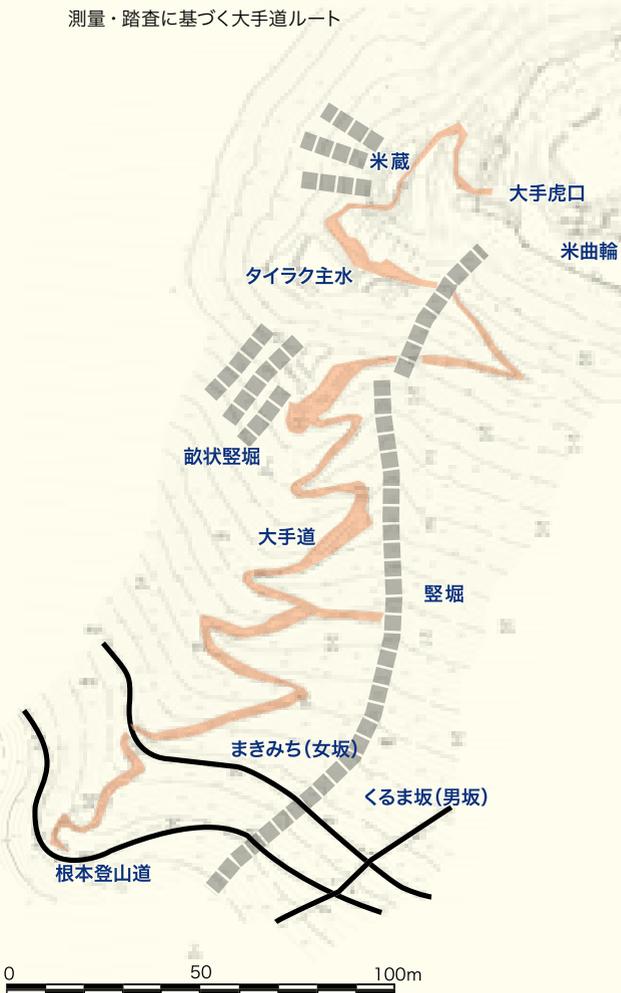
測量・踏査に基づく大手道ルート

んによって確認されたものです。尾根をつづら折りに登るこの城道は「馬道」とも呼ばれ、馬二頭が並んで歩けたそうです。現在でも道筋ははっきりしており、広い場所では大手の威厳を示すように4メートル近い幅で造られています。

大手道の西側は牢屋の沢につながる急斜面。東側は山頂から続く深い豎堀となっています。山頂直下でその豎堀を渡りますが、上部はよじ登ることさえできない切岸になっています。堀を渡り「タイラク主水」と呼ばれる曲輪に入りますが、ここから中心部の本城曲輪に入るためには米蔵、米曲輪の嚴重な防御を越えなければなりません。

大手道は根本登山道から上部は確認されていますが、御屋敷から根本登山道の間は今のところ不明です。山麓部は江戸時代以降は畑として耕作がされていたことから、その過程で失われたものと思われます。

※注意
大手道は遺跡保護と安全のため一般には歩くことができません。公園職員が同行・案内する場合に限り利用して頂いています。詳細はパークセンターで確認してください。



大手道から本城曲輪一帯のイメージ図

タイラク主水

曲輪には守備するものの名前が使われることがあります。内藤氏の家老とされる小倉の馬場家に伝わる古文書に、「家臣筋之者」として「太楽小左衛門」の名前があり、とても声の大きい方だった

そうです。また、津久井城の門番の声はとても大きく東の「小倉」まで聞こえたという伝承もあることから、古城図にタイラク主水と記された曲輪は、小倉の太楽さんが守備していたのかもしれない。



大手道東側豎堀



大手道

荒久および小倉・馬込、小網

津久井城の東端から東南部に位置する小倉・馬込、荒久は、さがみ縦貫道路と津久井広域道路が整備されていますが、城主内藤氏の重臣であったと思われる馬場氏ならびに大野氏の旧屋敷地などが残されています。また北西麓の小網(太井)も津久井城の根小屋にあたる地域です。

荒久

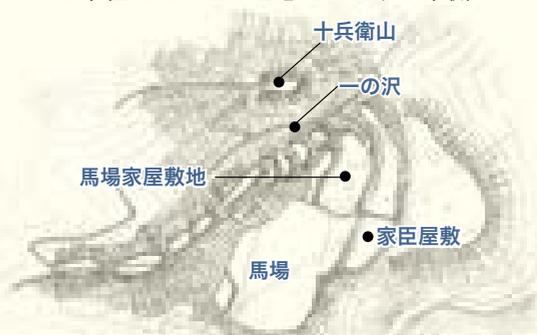
荒久地区は申川とその支流の尻久保川に囲まれ、小倉方面、三増峠からつながる古道が津久井城と交差する位置にあります。ここには津久井城主内藤朝行が祥泉寺熊野堂を修築した際の棟



荒久遺構見取図

札に登場する代官大野三郎左衛門の屋敷地と伝承される曲輪(現在は住宅地となっています)を中心に、大規模な削平地が連続しています。津久井城の南方、三増峠方面からの備えとして家臣

の屋敷が置かれた可能性があり、大野氏は津久井城南面の防備に責任を持った家臣であったかと思われます。東側の



小倉・馬込遺構見取図

では津久井城の時代から続いたと思われる空堀状の通路、炭焼窯も見つかっています。

小倉・馬込

旧馬場家屋敷地と、その北側尾根筋に連なる小曲輪群、および「一の沢」を挟んで「飯縄曲輪」・「鷹射場」方向から続く尾根の東端に当たる「十兵衛山」と、屋敷地・曲輪・物見台の施設が密接に連関するように配置されています。

また屋敷地の西南側には「馬場」の名が残る広大な曲輪も見られ、津久井広域道路を挟み東方に張り出した曲輪も一連の防御施設を構成していたと考えられます。

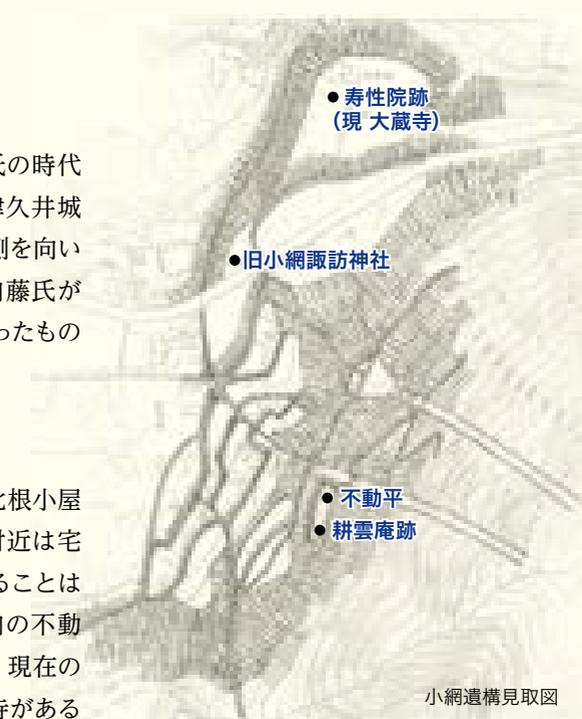
これら遺構の様子からも津久井城の東方の守備を担っていたことが十分に

想像できますが、一方で内藤氏の時代に敵方であった甲斐国方面(津久井城からみると西側)ではなく、東側を向いていることから、現在残る(内藤氏が整備した)津久井城以前からあったものではないかとの説もあります。

小網(北根小屋)

津久井城の北西麓にあたり北根小屋の通称が残っています。この付近は宅地化により往時の姿を想像することは難しくなっていますが、公園内の不動平や耕雲庵跡と呼ばれる曲輪、現在の小網諏訪神社一带、また大蔵寺がある曲輪などは根小屋を構成する遺構の一部と考えられます。この地域の北側を往時の武蔵~甲斐を結ぶ街道が通っていたこと、また相模川があることから、この方面への防備を固めるために小曲輪群を配したものと考えられます。

馬場から馬場家屋敷地周辺(2005年撮影)



小網遺構見取図

大野三郎左衛門屋敷地周辺(1995年撮影)



小網山麓(1995年撮影)



描かれた津久井城

城絵図とは

城絵図とは文字通り城を描いた絵図のことです。城を造る際には設計図、つまり絵図があったと考えられます。現在、津久井城の絵図は14点が確認されていますが、残念ながらこれらの絵図は戦国時代のものではありません。城の構造が分かると簡単に攻め込まれてしまうため最重要機密書類として扱われ、落城の際などに処分されてしまったことが想像されます。これは津久井城だけでなく戦国時代の城に共通することです。

現在残っている絵図は全て江戸時代に描かれたものです。お城や合戦のことを教養（軍学・兵法）として学ぶために「古城」として描かれ、諸藩が積極的に集めたものようです。

●「相州津久井古城図」

神奈川県立公文書館所蔵
津久井の郷土史家が所蔵していたものを公文書館が寄贈を受けたものです。曲輪と曲輪の関係や、堀や柵、土塁が詳しく描かれています。

津久井城城絵図の分類

津久井城の城絵図は、二つのタイプに分けられます。一方は、津久井城内の曲輪や堀、土塁などの城の構造、それらの配置やつながり方、位置関係を重視して描かれたもので、築城に関するテキストとして用いられたのではないかと考えられます。

もう一方は、周辺の街道や川、集落との関係を重視して描かれたもので、全てに三増峠が描かれています。これは三増合戦の作戦や用兵を語るテキ

ストとして用いられたのではないかと考えられます。

ここでは、それぞれを代表する絵図を紹介します。

●諸国古城之図より「相州津久井」

広島市立中央図書館浅野文庫所蔵
諸国古城之図は元広島藩主浅野家に伝えられた177の古城が納められた城絵図の集成です。樹木が点描で描かれています。周囲の川や集落、三増峠との位置関係が分かるように描かれています。



3. 津久井城、その後

戦国から徳川の時代へ

小田原合戦

豊臣秀吉は1585年に関白となり、2年をかけて四国・九州征伐を行い西国をほぼ平定しました。そして1588年に「関東・奥両国惣無事令」を出し、関東と陸奥国・出羽国における大名同士の戦いを停止させました。

そのようななかで真田氏とのあいだで領土問題を抱えていた後北条氏は秀吉の仲裁によって一旦は和解しました。ところが後北条方の沼田城主が真田方の名胡桃城を占領する事件が起こり、これを「惣無事令違反」として小田原攻めが実行されました。

天正18(1590)年4月、豊臣勢は、徳川家康を中心とした総勢20万人を越す大軍で小田原城を包囲、周辺の支城は次々に落城、結局7月に小田原城も開城し降伏しました。こうして、5代100年にわたり関東を治めてきた後北条氏は滅亡することとなりました。

津久井城の落城

津久井城も、豊臣秀吉の小田原攻めに伴って落城しています。津久井城を攻めたのは徳川方でした。戦闘に関しては4月に津久井城から出張した綱秀が白根(伊勢原市)方面で徳川軍と交戦したこと、井伊直政勢が津久井城を包囲、城から出てきた兵を討ち取ったこと、6月に鳥居元忠の家臣が足軽頭を討ち取った史料が残っていますが、大規模な攻城戦の記録はありません。

そして6月25日に家康が、家臣本多忠勝らに城内の武器・兵糧をよく調べられるように申し渡した、城の請け渡しの際の史料が残っており、それが津久井城の落城とされます。

落城時、小田原城に籠城していた津久井城主内藤直行は、北条氏直に従い高野山に隠棲したとされています。また津久井城に籠城したとされる内藤綱秀はその行方が知られていません。

Topics 下馬梅の伝説

八王子城が落城した際に、津久井城へ向かう伝令武将者が津久井城の落城を知り、落胆して馬から降り、ムチ代わりの梅の枝を道端に突き刺したところ、これが根付き花を咲かせたと伝えられます。「逆さ梅」とも言います。現在の梅は1980年に植えられたものです。(所在地/相模原市緑区広田16-12付近)



代官と陣屋

豊臣秀吉から領地を与えられ関東に入国した徳川家康は、各地に藩主や代官を置いて統治を始めました。代官は支配地に駐在するための陣屋を置いて政務の拠点としました。津久井城は廃城となったものの、政務・統治の拠点としての機能は引き継がれ、代官頭制度のもとで代官が置かれ、御屋敷一帯は再整備され津久井領を統治するための陣屋が設けられました。現在のパークセンター付近には「おじんや(御陣屋)」の屋号で呼ばれた旧家があり、代官守屋左太夫行広・行吉の陣屋の跡とされていましたが、発掘調査の結果、大規模な建物の跡などが発見され、その裏付けとなりました。

陣屋の成立年代は不明ですが、守屋氏が着任した1608年には設けられ、津久井領が一時期久世領となった1664年までには廃止されていたものと思われます。背景には代官頭制度の改編や江戸を中心とした物流体制の再編成があるとされます。寛文の検地帳によると「おじんや」を含む周辺一帯は「村民持畑」となっています。つまりこの時までに陣屋一帯は畑になっていたと考えられます。発掘調査でも、この頃建物が廃絶されていることが明らかになりました。また荒川(津久井湖に沈んだ荒川地区)には相模川と津久井往還の物流を統括する荒川番所が設けられました。

地域との関わりのなかで

津久井城・城山は、戦国時代には山城、また江戸時代初頭には陣屋（代官所）が置かれるなど、常に津久井の中心にありました。その後は江戸幕府・明治政府の直轄林（御林→官林）となり、一部は村人にも払い下げられました。この頃は村人の多くが養蚕で生計を立てており、城山にもたくさんの桑畑があったようです。また炭焼きも行われ、人々の生活を支える生業の場となっていました。

一方、風光明媚な相模川では舟下り、屋形船による遊覧などが行われ、東京・横浜方面から多くの観光客が訪れていました。津久井城・城山を観光地として売り出そうと、昭和の初めには、登山道や広場も整備されました。

その後、養蚕の衰退とともに桑畑は野菜畑や植林地へと変わりましたが、城山は山麓の人々の日常に欠かせない里山として、また歴史と自然が楽しめる身近なハイキングコースとして、多くの人々に利用されてきました。

御林

17世紀の中頃、城山は幕府財政を支える木材や薪、炭などの林産物を産出する幕府直轄林・御林となりました。御林の管理は麓の村に任せられ、村から選ばれた山守が管理にあたりました。村には御林の維持のため、見廻り・下刈り・間伐・植林、また幕府の要請に応じて木材や薪炭などの納入が命じら

城山御林絵図



れ、樹木はもちろん枯葉や下草であっても勝手に伐ることは禁じられていました。山守の給料は幕府からは支払われず、農家ごとに大麦や粟（銭の場合もありました）を出すなど、村全体で負担していました。城山北麓に今も残る針葉樹の林は、幕末の代官、江川太郎左衛門英龍の時代に植林されたもので「江川ヒノキ」と呼ばれています。

御林を守り伝えた歴史的な自然景観であり、津久井地域の豊かな山林資源を現代に伝えるものとして、平成27年4月1日に相模原市の登録天然記念物となりました。

養蚕

津久井で養蚕が発展したのは江戸時代の中頃と伝えられています。「城山のでっぺんまで、植えられるところはみんな桑畑だった」と言われるほど、山麓の集落でも盛んな時期がありました。

山間部の津久井地域は川があり多湿なことから、桑の栽培や蚕の飼育に適していました。また、八王子や上野原といった織物の生産地と近いことから、家内工業として繭や生糸の生産が盛んに行われ、貴重な現金収入となっていました。

川稼ぎ

鉄道や道路などの陸上交通が発達する以前、相模川を利用した水運は流上重要な役割を果たしており、川沿いの村々には船を運航する特権が認められていました。

小倉や荒川など川沿いの村では、高瀬舟を利用した物資の運搬をはじめ、材木を筏に組んで運ぶ筏流しに多くの人々が従事していました。昭和の初めまでは高瀬舟が厚木や須賀（平塚）との間で往来していたそうです。また川の近くに山を持つ人は薪や粗朶を簡単に伐出し売れることから「小倉では鉈一丁あれば暮らしていける」とも言われたそうです。

高瀬舟



炭焼き・シバ掃き

雑木林はマキヤマと呼ばれ、冬になると一年分の燃料として必要な分が伐採されました。当時、薪や炭は燃料として生活と産業の必需品で、シバ（落葉）は堆肥に利用されました。山中でも炭焼きが行われ、炭焼窯の跡も残っています。

4. 津久井城を公園にする！

津久井城スタイル

公園整備の経緯

1970～80年代にかけて、津久井城・城山周辺にも宅地化の波が押し寄せていました。国道413号沿いの太井や、南麓の根本で開発事業の計画が進められていました。一方では鎧作り、武者行列など「津久井城山を愛する会」の活動が目され、また地域のシンボルとして活かそうと、地元団体から「城山・文化の森宣言」が、郷土史家からは「津久井城を守れ」という要望書が出されるなど、そんな時代に公園計画が動き出しました。

県も津久井城や津久井湖・城山ダムなどの一帯の持つ潜在的な魅力や可能性に注目し、新規県立公園立地候補地として選定、公園緑地や文化財保護の専門家を交えた整備検討委員会をつくり1991年度から基礎的な調査をはじめ、2カ年で「県立津久井湖城山公園整備基本構想」、「同基本計画」をまと

御屋敷 (1995年)



めました。

計画をまとめるなかでは、「公園の整備は津久井城の遺構の破壊につながるのではないか?」、「いや、公園だからこそ津久井城を活かせるはずだ!」、「自然や歴史を身近に楽しんでもらうためには園内を循環する園路が必要」、「山には、人工的な園路はいらないだろう」というような核心をつく議論が噴出しました。そして、1993年11月に都市計画決定を行い本格的な設計に着手しました。

整備は城山ダム完成時に造られた旧津久井湖園地からはじまり、園地は季節の花が咲き乱れる「花の苑地」と、津久井湖と噴水がおりなす水景が美しい「水の苑地」として生まれ変わりました。

津久井城の調査に本格的に取りかかったのは1995年です。公園事業者である神奈川県津久井土木事務所（現在の津久井治水センター）は、その名の通り道路や河川の整備や維持管理が主な

御屋敷広場



仕事です。通常は工事に伴う発掘調査を教育委員会に依頼しますが、津久井城の調査では、東海大学の石丸^{ひろし}教授、近藤英夫教授を中心に自ら遺跡調査団を組織し、御屋敷の発掘調査を行いました。

この調査は、相模原市に引き継がれ現在も行われています。この毎年の調査結果を反映して整備計画・設計案をまとめ、専門家や地域の皆さんに公開、調整する場として設けたのが「公園整備と遺跡に関する調整連絡会」です。ここで出された意見や課題を再検討し事業化を進めます。従来の公園整備が、計画・設計→発掘調査（記録保存）→工事、という手順で行われるのに対し、ここでは、計画→発掘調査→設計→施設設置箇所の発掘調査→必要があれば設計の見直し→工事、というスタイルをとっています。遺跡の保全と活用を図る公園にするために、時間はかかりますがこのキャッチボールを大切にしてい

陣屋跡 (旧富岡邸、1995年)



ます。

そのような経験を経て、2003年には根小屋地区の一部が開園、2006年には陣屋跡付近に公園パークセンター、翌年には研修棟が完成しました。これら拠点が整備されたことで運営面での充実も図られ、歴史・自然を活かした様々な活動が楽しめるようになっていきます。

津久井城の整備を念頭にした「津久井城の整備に関する特別専門会」を組織したのは2008年です。山頂部の調査に先駆けての条件整理や発掘調査計画の立案、整備計画の検討等を行っています。2011年からは「自然環境に関する連絡会」も立ち上げています。

津久井城という文化財と豊かな自然の活用と保全、「歴史的風景」の未来への継承に向けて……。

パークセンター・研修棟一帯



文化財としての津久井城への関わり方

「津久井城整備のための暗黙のコード」～公園事業者の経験則～

code 1-「地形改変」を避ける。

code 2-「まがいもの」はつくらない。

code 3-地元の「理解と協力と信頼」と。

code 4-適正な「保存と活用を推進」する。

※津久井城談話より

公園の施設整備や管理運営に当たっては、津久井城の持つ価値を損なわず、更に育むことを念頭に、地域や文化財関係者とのきめの細かい意見交換を通じ、信頼関係の構築と試行錯誤を重ねながら進めてきました。今後、更に津久井城の保全と活用の充実を進めるためには、津久井城に関わる全ての人が、それぞれの立場から、津久井城のあり方を考え、その考えを多くの人たちと共有し、行動していくことが求められているのではないのでしょうか？

竖堀を壊さず園路を整備



これまでの取り組み例

遺構の形状を保全する

- ・園路整備による遺構形状の破壊を回避するため、バリアフリーに配慮した特殊な基礎構造のデッキ園路を採用、盛土をする場合でも最低限にとどめ、原地形が確認できるようにしています。
- ・古道や境界木などを残し、かつての土地利用が理解できるように配慮しています。
- ・パークセンターなどの施設整備に当たっては、人力施工を主とし、遺構面を保護するために、盛土をしたり基礎や部材の形を工夫することで、遺構の破壊を回避しています。

パークセンター一帯の盛土



歴史的な風景を保全する

- ・憶測によるデザインや史実のない施設により誤解を招くことがないように留意しています。
- ・城坂橋より奥は、なるべく在来の植物を植えることとし、山城の景観保全に配慮しています。

地元へ愛される

- ・誰もが気軽に関わることができるよう、地元への情報発信や意見交換に努めています。秋の収穫感謝祭は、地元の多くの皆さんに支えられて開催しています。
- ・根本自治会館のサクラを残していただき、公園から見る風景の保全にご協力を頂いています。

遺構の保全と活用

- ・風景や景観の保全や改善、過剰な利用による遺構の破壊防止を目的に、試行錯誤を繰り返しながら維持管理を行っています。
- ・学術的な調査を分かりやすく伝えられるよう、展示や解説に配慮するとともに、支障のない範囲で調査の公開など、参加の機会を設けています。
- ・津久井城をはじめとする中世城郭への理解、津久井地域の歴史への理解を深めるための書籍などの収集、関係機関との交流、座談会の開催などを行っています。

これからの取り組み

- ・文化財としての価値を損なわないように配慮した公園整備を進めて行く過程で、より多くの皆さんが、自らの意思で関わるができる様々な機会を提供し、情報や人材といった地域の財産の集積と更なる高みと広がりを目指しながら地域を支えていきたいと思えます。

バリアフリー園路



特殊基礎の施工状況



発掘調査見学会



5. 津久井城を掘り起こす

伝承は本当だった！

1995年、城主の居館跡と伝承されてきた「御屋敷」という曲輪を調査するための調査団（団長／東海大学石丸熙教授）が組織されました。現場調査には同大学近藤英夫教授を中心に、東海大学、明治大学の学生、公園計画を担当した調査会社担当者、地元の建設会社も加わりました。

かつての土地所有者であった小川良一さん、小俣英次さんからは、次の話を伺いました。

小川良一さん

- ・戦時中サツマ芋を作っていたが、収穫の際に作業していた者のひとりが鎌の先に石をぶちつけ、掘り出そうとしたら三尺もある切石だった。意地になって掘り返したところ、おびただし敷石があった。しかもその一つには中央に矢印が太く刻まれていた。戦時中であったのでそれ以上の捜索はやめ目印の石を置いたが、その石の場所が不明になってしまった。戦後復員してから掘ってみたが、敷石は見つからなかった。
- ・耕作していると茶器の破片などがよく出てきた。小判も出土している。

小俣英次さん

- ・祖父が耕作中につけたものとして、べっ甲や銀製のかんざし、象牙の根付け等を所有している。（パークセンターに寄贈いただきました）
- ・畑の南側に大きな石があるが、ここは御屋敷の庭園跡だと伝えられている。
- ・東の方で石畳を見つけた。場所はだいたい分かる。

当時、御屋敷には、木立のなかに「津久井城山を愛する会」の根城？であった小屋（会のメンバーがつくったログハウス）があり、そこを調査団の拠点としてお借りしました。まず生い茂った篠竹刈り、スギやヒノキの伐採からはじめ、8月28日に小川さん・小俣さんの話をもとに場所を設定したトレンチ（試掘坑）の調査にとりかかりました。

結果、伝承の通り、建物の跡など様々な遺構が顔を出しました。それは「津久井城は、間違いなくここに存在した。」という確たる証拠でした。またお二人のお話にあった、おびただし敷石（実際は、城が破壊された時に処分された石だまり）や、東の方の石畳（実際には焰硝蔵えんしょうざらの床）もみつかりました。

次頁から発掘調査の結果を紹介します。



「おびただし敷石」は、城が破壊されたときに処分された石だまりでした



べっ甲、銀製のかんざし



「東の方の石畳」は焰硝蔵の床の石でした



調査前の御屋敷



「南側の庭園跡」は、江戸時代初頭に使われた入口部分の石でした



小中学生も参加した発掘調査の様子

本城曲輪の北東隅に「もん」と呼ばれていた場所があります。階段状の石敷き通路と礎石建物（門）の跡が確認され

ました。米曲輪から本城曲輪への入口と考えられます。

本城曲輪虎口遺構図



米曲輪階段状遺構

土塁北東端で階段状遺構①及び石敷き遺構②がみつかりました。米曲輪から本城曲輪への通路と考えられます。

通路は本城手前で土塁に沿って一度折れ曲がる構造③となり、また階段は上に行くほど狭まっています。



米曲輪階段状遺構

本城曲輪石敷き (写真手前側が本城曲輪)

土塁内側で比較的大きな石が敷き詰められた石敷き遺構④が確認されました。

土塁に沿って石積み⑤と思われる遺構が確認されました。土塁下部の土留めと思われます。

石組み遺構（排水構と思われる⑥）の北側では石敷き遺構は確認されていません。ここで曲輪が扉あるいは柵で区切られていたと考えられます。



本城曲輪石敷き

礎石建物址（門）

土塁に沿った石敷きに並行して4石の礎石（柱などの基礎石）が見つかりました。本城曲輪への入口部分に当たり、絵図などへの記載はありませんが、この場所が「もん」「もんあと」と呼ばれていたことから「門」があったものと考えられます。間口は約270cm、奥行きは約90cmで、奥行きが狭いことから上部に櫓などを載せない構造だったと考えられます。



門の礎石と考えられる石

米曲輪石敷き遺構

米曲輪の東南隅、米曲輪大手虎口からの城道は土塁を回り込み、本城曲輪虎口へと続いています。土蔵との境界にあたる箇所で大規模な石敷き遺構が見つかりました。古城図と比較してみると、「矢蔵」と記されたところにあり、比較的大きな石（建物の基礎石か）も見つかっていることから、絵図が示すように矢倉や、門や柵があった可能性があります。



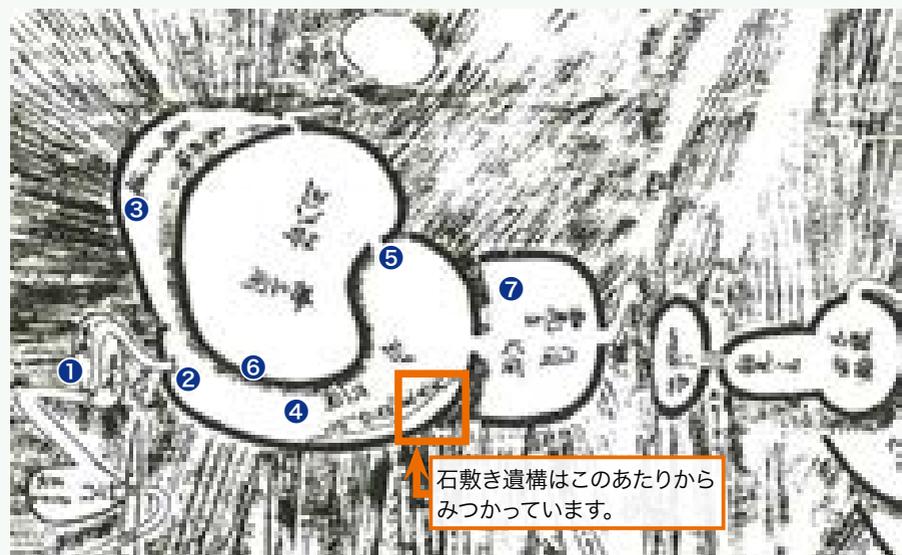
石敷き

が狭くなっていますが、同じ技法で作られています。1569年古河公方足利義氏は、小山秀綱に滝山城と津久井城の普請に人足を出すように命じていることから、同じ人たちによって作られたのかもしれない。

石敷きの通路

石敷きの通路は、同じ後北条氏の城である滝山城でも見つかっています。それと比べると津久井城のものはやや幅

相州津久井古城図（部分）



※○数字は P45 の図中番号の位置

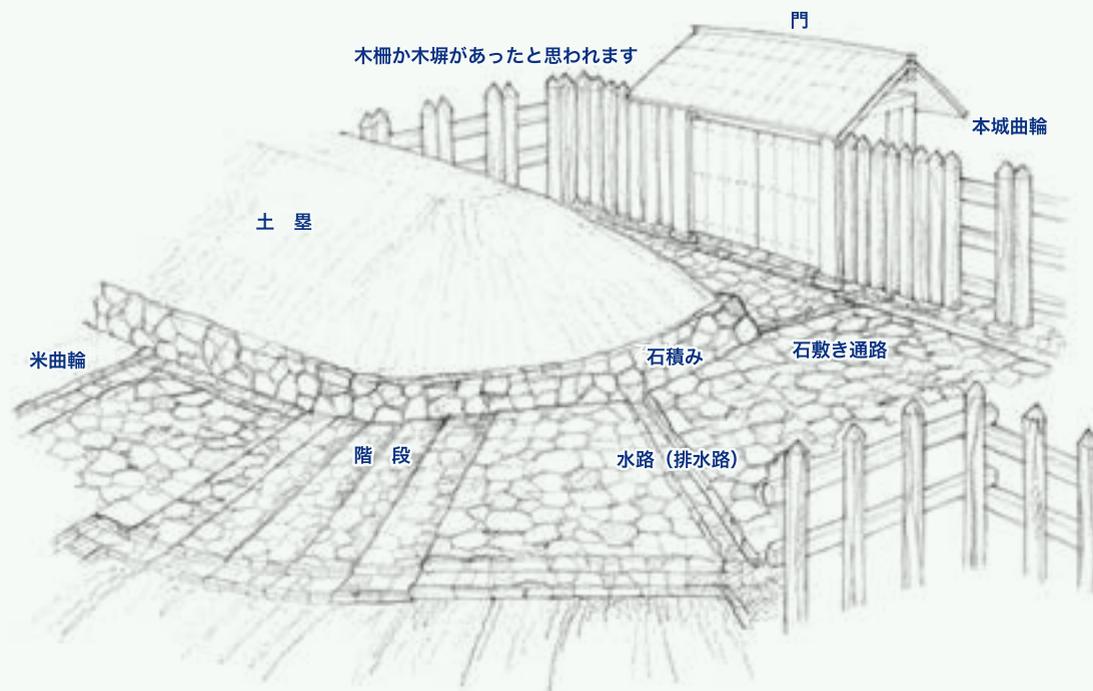
破城（城破り）について

廃城に伴い城の石垣の一部を崩す、堀を埋めるなど、城郭の主要部分を破壊する儀礼的な行為を破城と呼んでいます。津久井城の本城曲輪群では米蔵虎口、米曲輪大手虎口、本城曲輪虎口で、土塁や石積みを壊した破城の痕跡と思われる遺構が確認されています。



米蔵虎口破城の跡（石だまり）

本城曲輪虎口の当時の姿を想像してみました。



馬場東の堅堀

御屋敷の北側上段の曲輪を総称して「馬場」と呼んでいます。調査した堅堀は城坂を挟んだ曲輪の東側に位置しており、南北方向に長さ約80m、幅は4～8mの規模で掘られているものと想定されます。小堀をジグザグに連結させて、一条の堅堀として機能させています。また底部を階段状にし、砂利や砂を充

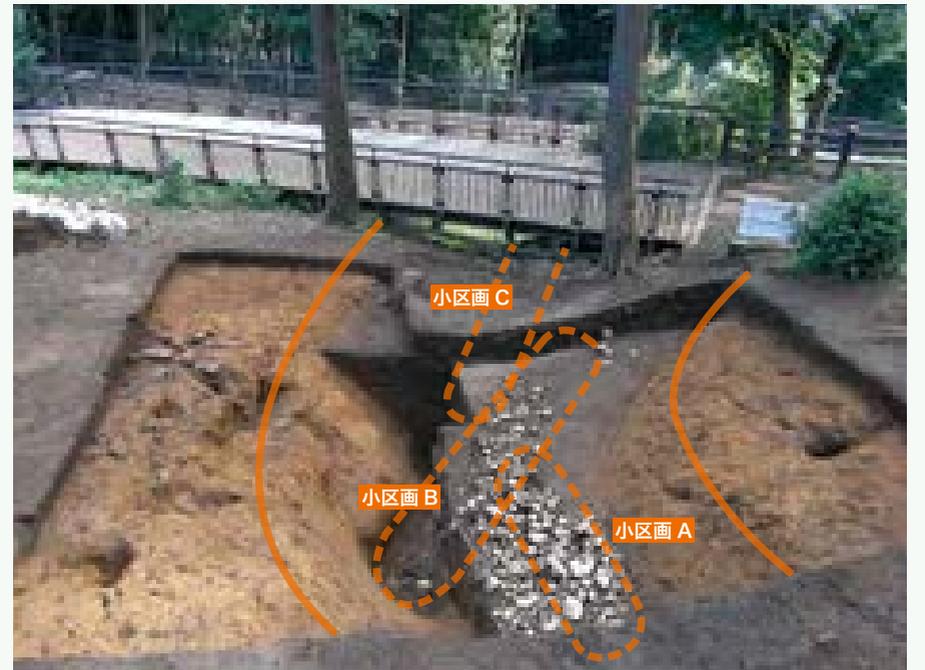
填していることから、防御機能だけでなく通路としての役目を持っていたことが想像されます。

この堅堀は絵図類に記載はされていませんが、地面がややへこんでいたことから堀の存在は想定されていました。今のところ周辺の曲輪との関連は不明です。

発掘調査部の下部



平面状況



Topics

ジグザグ堀の謎

なぜ、この堀はジグザグに掘られているのでしょうか？

一つは工事の方法によるものです。堀を作る時に一定区間をグループ単位で工事した（「丁掘り」と呼びます）ものと考えられ、その際の誤差が考えられます。また、意図的にジグザグにしたことも考え

られます。江戸時代の軍学者（甲州流）、松宮観山による「土鑑用法直指抄」は、堀をつづら折りにすると、人の往来が見えにくくなり、武器を隠すこともできること、安全に往来ができて、城を守るには大きな利がある、と書いています。

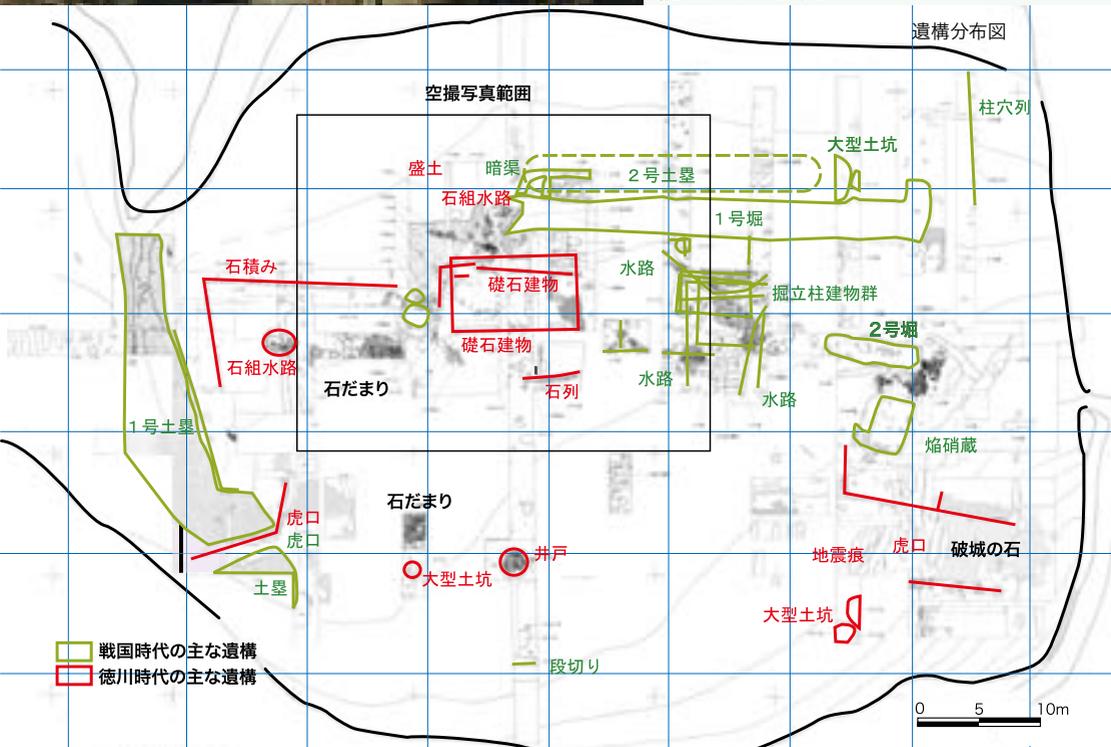
津久井城で最大の規模を持ち、御屋敷広場として利用されている曲輪は、地域の人たちから「御屋敷」と呼ばれ城主の居館跡と伝承されてきました。1995年から10年間にわたる調査の結

果、虎口をはじめ掘立柱建物、焰硝蔵、大規模な空堀、土塁などの遺構、また舶来の磁器や希少なかわらけなどの遺物が発見され、主殿の形状や規模は不明ですが、伝承どおり津久井城主内藤

御屋敷空撮

氏の居館跡であることが確認されました。

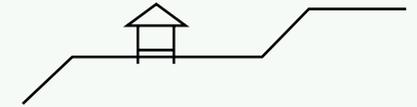
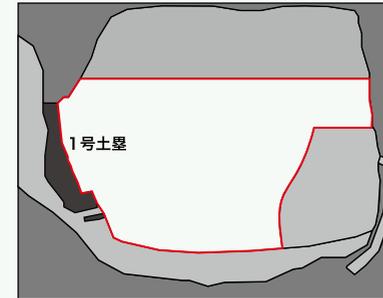
また天正18(1590)年の落城後には大規模な造成事業が行われ、徳川幕府の陣屋関連施設として使用されていたことも分かっています。その遺構として、石材を多用した虎口や礎石建物、庭園と考えられる石組みなどが確認されています。



曲輪造成について

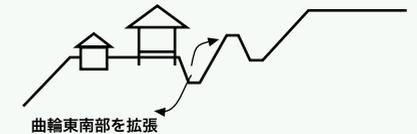
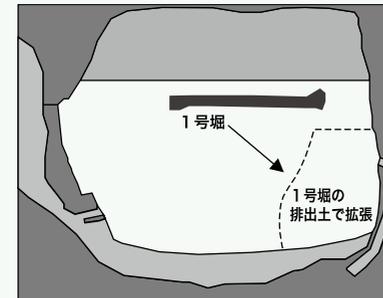
曲輪は1500年代の初めに造成され、二度の改修を経て今の姿になったと考えられています。

中世当初の造成



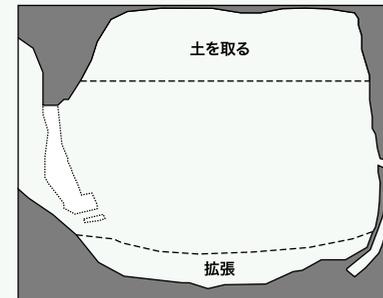
・赤枠の範囲が造成される。

一度目の改修



・曲輪東南部が拡張される。
・1号堀、2号土塁が築かれる。
・焰硝蔵が築かれる。

二度目の改修



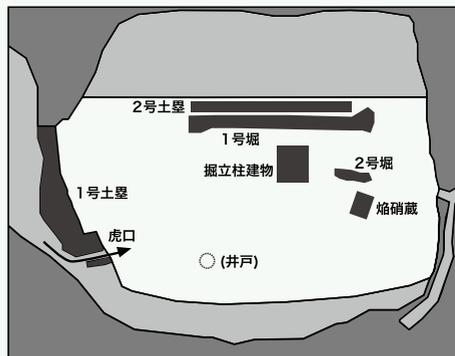
・北側を切り崩し、南側を拡張する。
・土塁は切り崩し、堀は埋め立てる。
・庭園や水路の築造。
・礎石建物の建築。

戦国時代津久井城主内藤氏の居館として機能していた時代の遺構としては、複数の掘立柱建物、虎口、焰硝蔵、空堀、土塁、石組水路などが見つかりました。当時は西側にある虎口から出入りしていたものと考えられます。

これまでの研究で東国の領主階級の館や屋敷は、京都のスタイルを取り入れており、主殿・常御殿・会所が設けられていました。津久井城御屋敷でも執務、就寝などの場としての主殿（広場をとまなう）と、応接の場所としての会所

(庭園を伴う)が設けられていたのではないかと考えられています。

戦国時代遺構見取図



西側虎口



西側虎口

戦国時代の虎口は西側にあったと考えられています。土塁および通路状の

遺構が確認されており、通路は牢屋の沢に沿って続くことが想定されます。

空堀（1号堀）

三増合戦の後の改修の際に掘られたものと考えられ、規模は上幅2.5～3m、底幅1.5m、深さは2.3～2.9mの断面が逆台形型の堀で、曲輪の北側を東西に横断するかたちで掘られています。

焰硝蔵

3m×4mの長方形の遺構で、床は川原石や粘土混じりの砂利を敷き詰め、壁は粘土で覆われていた痕跡があります。また西側から階段を下りて内部に入る半地下式となっており、北側には焰硝蔵を守ったと思われる空堀(2号堀)が掘られています。このように入念な構造から、この遺構は内部に火薬を保管した焰硝蔵(火薬庫)と考えられています。

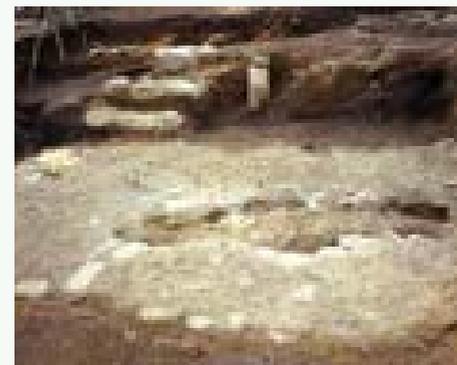
掘立柱建物

戦国時代の建物の多くは基礎石がなく、直接地面に穴を掘り柱を建てる掘立柱型式で造られていました。御屋敷の建物は、何度か造り変えられているようですが、確認されているだけで8棟分の建物跡が見つかりました。この中のいくつかは主殿を構成する建物だったのかもしれませんが。

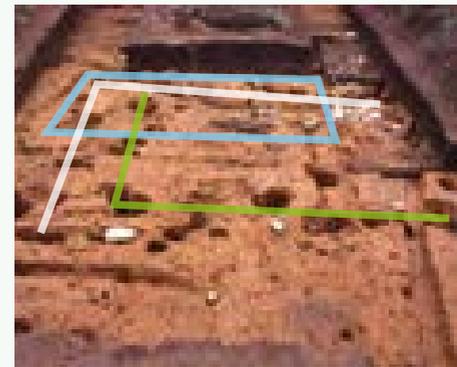
空堀（1号堀）



焰硝蔵



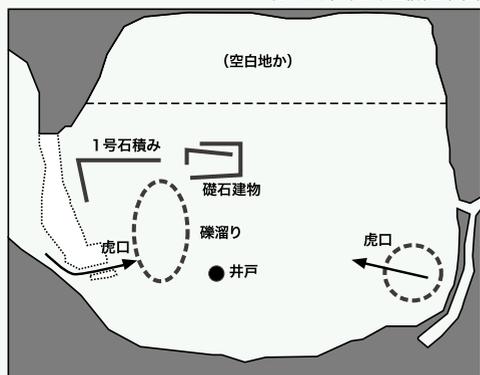
掘立柱建物跡



津久井城落城後、御屋敷の施設は一旦取り壊されます。そして時期は明確ではありませんが、曲輪は北側の土手を切り崩し、その土を使って南側方向に大きく拡張されます。その後、陣屋関連施設として生まれ変わったようです。

曲輪中央部では建物、また東側では

徳川時代初期遺構見取図



石を使った大規模な虎口が見つかり、施設には主にこの東側の虎口から出入りしたものと考えられます。また池と思われる石組み、中世の施設を壊した際に石などを投げ込んだ石だまりも見つかっています。

建物と庭園の跡

曲輪のほぼ中央で2棟の建物が見つかりました。礎石建物と考えられますが石は全て抜き取られています。また2棟はほぼ同じ場所に重なって建てられており、火災にあつて建替えられたことが分かっています。建物の構造は瓦が出土していないことから、屋根は板葺きか萱葺き、壁は焼けた壁土が発見されていることから土壁だったことが想像

建物と庭園跡



できます。

また、石で組んだ排水路が各所に設けられていますが、それらとは明らかに異なる、石を池の形状に組んだ遺構も見つかっており、庭園があったのではないかと考えられています。

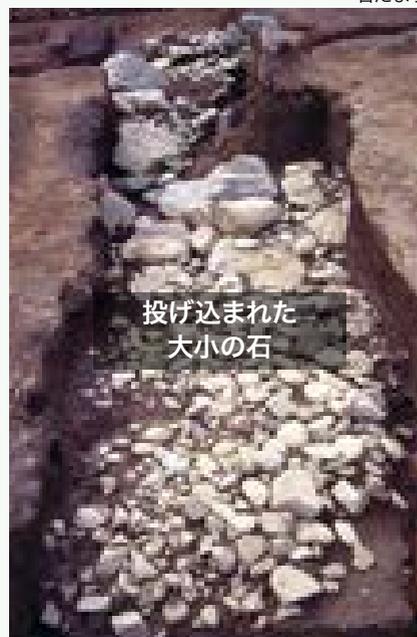
東側虎口

幅約4m、軸方向6m、両袖に石垣に築かれた階段状の虎口です。袖部には水路も築かれています。おそらく登りつめた個所は門となっていたと思われます。

陣屋を襲った地震

この虎口を造っている最中に地震があったようで、土を固めた地盤に15cmのズレが見受けられ、その上に石垣などが造られています。記録では1633年に寛永小田原地震が起きていますが、その時のものの可能性があります。

石だまり



地層のずれ



東側虎口



石だまり（破城の痕跡）

御屋敷では二度にわたる破城の跡が見つかりました。破城とは城の機能無くすために石垣などの一部を破却することで、多くは儀式的に行われます。ここでは津久井城落城時に曲輪が徹底して破壊されていますが、その上に造られた陣屋関係施設でも、陣屋が廃止される際、虎口石積みなどで破城が行われています。

しんでん 御屋敷南側虎口

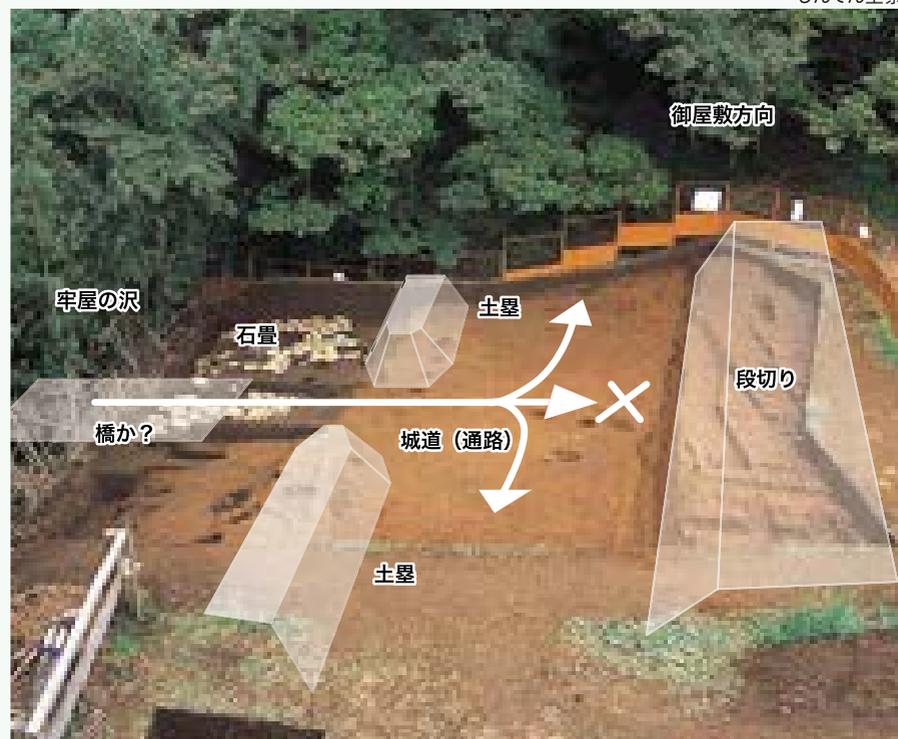
牢屋の沢に面したこの曲輪は、上段の御屋敷の前面に位置することから、防衛上重要な役割を持っていたと考えられます。現在の城坂橋を架けるための工事に先立ち2001年に行われた発掘調査で、牢屋の沢方向に対峙した土塁や石畳、段切、また橋あるいは門に関連すると思われる大型柱穴など、津久井城の城郭の一部である虎口関連遺構が確認されました。

ここで発見された虎口は、土塁で狭め

た通路の正面に段切を配置し、攻め込まれた際に敵兵を南北に分散させる構造になっています。また、御屋敷と同様に落城以降も陣屋関連施設が置かれていたことが調査により確認されています。

なお、この曲輪は「しんでん」と呼ばれていますが、これは江戸時代の新田開発に、また「牢屋の沢」についても陣屋の水牢が置かれていたことに由来すると考えられ、戦国時代の名称ではありません。

しんでん全景



土塁

牢屋の沢に面して土塁が築かれていました。削られているため高さは分かりませんが、当時は御屋敷方向からの屋根と一体化していたものと考えられます。牢屋の沢へ下りる現在の登山道は後世のものでしょう。

段切り

牢屋の沢を渡り、土塁に挟まれた幅4mの城道を抜けると曲輪には段切りが造られています。段切りの上から攻撃を受けるため、敵兵は直進できず分散せざるをえません。

石畳

牢屋の沢に面した部分に石を敷き詰めたのは、地盤を安定させるために設けたものと考えられます。おそらくこの場所に重量がかかる施設、つまり牢屋の沢を渡る橋があったと考えられます。

大型柱穴

牢屋の沢、土塁に並行して間隔が190cmの2つの柱穴があります。穴の大きさから約30cmの柱が立っていたもので、門柱、あるいは橋に関連するものと考えられています。

建物跡

陣屋時代に相当する掘立柱建物跡と礎石を用いた建物跡が見つかっています。柱を多く使い、その間隔が通常より狭くなっていることから櫓などの高さのある建物があったものと思われる。

牢屋の沢側拡大



おじんや 陣屋の遺構

陣屋の痕跡

現在の研修棟が建つ場所には、かつては民家があり、「おじんや」という屋号で呼ばれていました。『新編相模国風土紀稿』には、この場所に陣屋があったことが書かれています。

陣屋とは

江戸時代、幕府直轄領の代官が駐在する施設のことで、地域の民政を行なった場所です。今で言えば市役所と警察、裁判所などが一緒になった施設

のようです。1998～2002年にかけ、公園パークセンターなどの拠点施設整備に先立って発掘調査が行なわれました。調査では大型の礎石建物やそれに関連する掘立柱建物群が発見され、その構造と出土遺物などから、江戸時代初頭に陣屋に関する施設がこの場所にあったことが明らかになりました。

礎石建物跡



遺構見取図

大規模な建物群

左写真中、白線で囲まれた箇所が建物の柱があった場所です。建物は礎石建物です。この地域では江戸時代になってから造られるようになりました。

ここでは浅い穴を掘り、こぶし大の石を根固めとし、礎石を置いた構造になっています。主棟としての礎石建物跡1棟と関連する掘立柱建物跡5棟が見つっていますが、主棟には、九間^{このま}という、畳に換算すると18畳もある大きな部屋が2つと、8畳間が3つあります。

これらは近世前期では一般的なものとはいえない規模であり、出土した鎧具足の破片や屋根瓦などの遺物などからも、陣屋関連施設であると考えられます。

主棟の前面は庭のような広い空間があり、それを挟んで木柵(塀)と思われる柱列の遺構が見つっています。広い空間は、いわゆるお白州だったのかもしれない。

荒久空撮



眼下に流れる串川、東のとずら沢、西の井戸ノ沢・尻久保川に挟まれた山裾に平場が見られます。

津久井広域道路の整備に伴い、2011～2013年にかけて発掘調査が行われました。荒久と小倉馬込との境にあるとずら沢には、沢から登る堀底状の古道があることが発掘調査前から知られていましたが、調査の結果、中世までさかのぼる道状遺構であることがわかりました。道状遺構は人の背丈以上に城山の赤土をV字状に深く掘り込み、カーブを描きながら上の平場へと続い

ていました。道状遺構は山裾をそのまま西へと走っていきます。その先にあるのが、井戸ノ沢・尻久保川の左岸に築かれた戦国時代の曲輪です。調査できたのは曲輪の南半分ですが、15世紀末から16世紀初頭には曲輪が築かれ、曲輪は段切り・盛土造成によって東西60～70mにわたる平場が造り出されており、2度の改修が行われた事がわかりました。

炭窯の跡

荒久地区の東側、旧県道がとずら沢を渡る場所に「馬つくろい場」と呼ばれる場所があります。その東側から5基の炭窯が見つかりました。窯はいずれも横穴式土窯と呼ばれるもので、地山を切り崩し、掘り抜いて築いたものです。周辺では江戸時代に使われていた炭窯が見つっていますが、出土した炭化物を調査したところ、古いものは中世、津久井城の時代に使われた可能性もあるようです。



道状遺構

津久井城に入る道状遺構は津久井広域道路の一部として生まれ変わりました。



掘立柱の跡

曲輪内には柵を構えていたのでしょうか、柱穴列などが発見されています。

城坂曲輪群南地点

ここでは津久井市民調査グループによって遺跡の内容を確認するための発掘調査が進められています。雛壇状の曲輪群最下段の「里山広場」で2012～2017年に行われた調査では、庭園に伴うと考えられる池の跡が確認されました。



里山広場調査風景

石敷き遺構

曲輪のほぼ中央部で、河原の丸石や角のある山石を敷き詰めた石敷き遺構の広がり確認されています。石敷き遺構は、広がり中央部に向かって浅く窪むように構築されており、隙間なく丁寧に仕上げられています。石敷きの上に堆積した土を分析したところ、水中に生息する藻類の化石が見つかり、池の跡であることが判明しました。



石敷き遺構

庭園の池跡か

池の性格については、その丁寧な造りから庭園に伴うものではないかと推測されています。池が造られた時代は出土した「かわらけ」と呼ばれる土器の年代から戦国時代であることが確実です。後北条氏の支城で庭園に伴う池が見つかったのは八王子城や鉢形城など拠点的な城郭に限られており、津久井城における発見は大変注目されます。



かわらけの出土状況



導水路の石組み



城坂曲輪群南地点遺構図

池の南西側には水を引き入れたと考えられる導水路跡も見つかっていません。通常、庭園は城主の居館に伴って

造られるもので、城坂曲輪群南地点がどのような性格の場所であったのかが注目されます。

津久井市民調査グループ

津久井城跡の調査は、1996年より旧津久井町教育委員会と東海大学が中心となって進められ、市町村合併を経て相模原市教育委員会へと引き継がれました。2010年からは、市民との協働調査によって調査・活用を進めるため「津久井市民調査グループ」を

新たに組織し、市民調査員、市教育委員会（文化財保護課）、市立博物館、(公財)神奈川県公園協会が連携して、津久井城の歴史的な位置づけと価値を明らかにしていく新たな調査へと歩み始めています。専門家による調査が多いなかで、市民自らが地域の文化財の保存活用に取り組んでいます。



レベルング



遺構検出



遣り方測量

小倉・馬込地区

小倉・馬込空撮写真



津久井城の東山麓に位置する小倉・馬込地区は、城主内藤氏の家老馬場氏が居住した場所とされ、屋敷地をはじめ「馬場」という地名や家臣の屋敷跡とされる場所が残されていました。現在、その大部分は津久井広域道路となっていますが、道路整備に伴い2006～



空堀

2007年にかけて行われた調査では、旧石器時代の石器群や縄文時代の落とし穴、戦国時代の堀や江戸時代の建物跡など時期を違えたさまざまな遺構・遺物が発見されました。

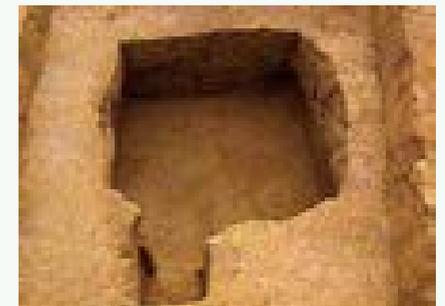
戦国時代の空堀

津久井城の時代に築かれたと思われる空堀です。上部の幅は約8m、V字状になり深さは最大で3mほどでした。江戸時代になってからも通路としても使われていたようですがその後、大規模な造成工事が行われ、埋め立てられています。



曲輪と土塁

堀の北側では曲輪と土塁の跡が確認されました。しかし江戸時代の造成によって上面が削平されているため、具体的な形状は不明です。いずれにしても馬場氏が守った曲輪があったことは間違いなさそうです。



地下式坑

曲輪からは6か所の「地下式坑」が発見されました。その名の通り地下に掘った穴（地下室）なのですが、何に使われたのかは分かっていません。灯を置いたであろう小穴もあることから、貯蔵庫や避難所として使っていたと思われます。

津久井城の出土遺物1

津久井城内の各地点で行われた発掘調査では陶磁器、かわらけ(土師質土器)、金属製品、石製品、銭貨、有機質遺物など様々な遺物が発見され、当時の津久井城を知る手がかりとなっています。土器・陶磁器で見ると、かわらけが全体の90%を占め、国産陶器が8%、貿易陶磁器が2%ほどです。地点ごとにやや様相は異なりますが、落城までの年代で見ると、遺物からは16世紀中ごろ及び天正年間が、津久井城の中心的な時期とみられています。

陶磁器の様相

津久井城で出土する陶磁器は、国産陶器と中国からの貿易陶磁器です。戦国時代当時、日本には磁器を作る技術はありませんでした。国産陶器は瀬戸・美濃窯の製品が主流ですが、なかには関東では珍しい備前窯の甕などもあります。貿易陶磁器は染付磁器の碗、皿が主で、白磁や青磁、青白磁も出土しています。なお近隣の八王子城の御主殿では「威信財」と位置付けられる優品の貿易陶磁器が多く出土していますが、津久井城からは、全くと言っていいほどそのような骨董品、優品は出土していません。

かわらけ

かわらけとは、主に儀式などに使われた素焼きの土器のことで、特に皿(坏)状のものを指します。津久井城のかわらけにはいくつかのタイプがあり、大きく分けると

- ①口径が10cmほどでザラザラな土で作られた、ろくろ成形タイプ。
- ②口径が底径に対して大きめで、緻密な土で作られた、ろくろ成形タイプ。
- ③口径が大きく緻密な土で作られた、手づくね成形タイプ。

があります。①は在地色が強く、一番数が多いものです。②、③は数が少なく、②は八王子城と関係があり、③は小田原から搬入された「京都系」とされる、他の北条氏有力支城でもあまり出土しない希少なものです。かわらけの様相からは、津久井城と八王子城、小田原城との物流がみえてきます。



②のろくろ成形かわらけ



③の手づくね成形かわらけ



御屋敷出土かわらけ



御屋敷出土陶磁器(左:貿易陶磁器、右:国産陶磁器)

灯明皿

灯明皿とは、油を入れた皿に撚り紐の灯心を浸し、火をつけたものです。津久井城では口縁部に煤が付着した「かわらけ」が数多く出土しており、灯明皿として使用されたと考えられます。菜種油は江戸時代になってから普及しだすと言われていますが、津久井城本城曲輪群で出土したかわらけは、煤の分析の結果、エゴマ油が使用されたのではないかとの見方がなされています。



灯明皿 (本城曲輪群出土)



金属製品 (城坂南曲輪群南地点出土)

金属製品と鍛冶関連遺物

金属製品としては鉄釘が大半を占め、建物跡の存在が想起される御屋敷や本城曲輪群で多く出土しています。その他かすがい、蝶番、小札などの鉄製品があり、銅巻きが施された小柄 (小刀) なども出土しています。鉄砲玉も2点あり、津久井城で鉄砲を保有していた、または戦闘時に撃ち込まれた可能性も考えられます。

また、本城曲輪群や御屋敷からはフイゴの羽口やるつば、とりべ、鉄滓が出土しており、るつばの分析では金や、銅・錫・鉛の合金とみられる金属が付着していることが判りました。このことから、城内で金属製品の加工がおこなわれていたと推察されます。

銭貨もあります。当時は永楽通宝をはじめ中国の銭、それを模铸した銭が流通しており、津久井城からも様々な銭銘の銅銭が出土しています。



小柄 (本城曲輪群出土)



銅巻き部分の拡大



銅銭「永楽通宝」
(御屋敷出土)



鍛冶関連遺物 (御屋敷出土)

御屋敷の鮑貝殻

津久井城主の居館跡「御屋敷」の発掘調査では、空堀の底から鮑 (アワビ) の貝殻が出土しています。戦国時代、鮑は重要アイテムでした。出陣に際して敵を「打ち、勝ち、喜ぶ」ごろ合わせで打ち鮑、勝栗、昆布を食べる「三献の儀」が行われていたとのこと。また、また江戸初期の書物『甲陽軍鑑』には「貝鮑」という、鮑の貝殻に身を盛り付けた婚礼料理が登場します。津久井城で出土した鮑の貝殻も、そうした儀式や宴のために持ち込まれたものかもしれません。



鮑の貝殻出土状況

表面採集

略して「表採 (ひょうさい)」とも言いますが、地表面に「落ちていた」遺物を採集して、そこにどのような遺跡・遺構があるのか想定する作業です。たとえば津久井城ではその曲輪の機能や使われた年代などを、ある程度想定することができます。これまで津久井城内のいろいろな場所で縄文時代から近・現代まで様々な時代の遺物が表採されており、そこにはわずかですが戦国時代の遺物も含まれています。山中ではまだ戦国時代の遺物が地表面で発見できるかもしれません。見つけたら公園までご連絡ください!



表面採集された遺物

市民とともに

発掘調査を地域学習の機会として活かしたい！

津久井城は地域の文化財であり、それを守るためには、やはり私たち事業者を含め地域の皆さんの力が必要ではないかと思えます。また公園として整備を進めているのですから、津久井城を身近に感じてもらえるような工夫をする必要もあります。そこで津久井城の調査に当たっては「地域学習の一環として地域の皆さんに調査に参加してもらう」また「訪れる公園利用者に対し可能な限り現場を公開する」との考え方で、津久井城を知るための調査は津久井町が、公園整備のための調査は神奈川県が行う役割分担を確立し、津久井生涯学習センターとの連携で地元の小中学生の参加

津久井城市民調査グループによる調査



による発掘調査や津久井城探検隊など、気軽に参加できるイベントなどが継続して行われてきました。

かながわ考古学財団による本城曲輪の発掘調査見学会には、300人を超える皆さんに山頂まで登って頂きました。グリーンカレッジつくいの津久井城談話は「登城召され!」の呼びかけで、研修棟はいつも満員になります。また津久井城市民調査グループによる発掘も行われています。

公園では、利用者の皆さんに津久井城について理解を深めてもらうために、ボランティアの皆さんと一緒に年間を通じ様々な催しを行っています。また遺跡保護のための作業にも取り組んでいます。ぜひご参加ください!

パークセンターの展示

「城山と地域」「歴史」「自然」をテーマに展示。市民ボランティアの情報提供による日々の自然紹介や発掘調査の速報など新鮮な情報が満載です。

パークセンター展示解説



津久井城談話 登城召され!



発掘調査見学会



遺跡保全作業



歴史登山ガイドウォーク 「津久井城キャッスリング Castle (城) +ing」

季節ごとに開催されるガイドウォークは、大手道など、普段は公開していない城道などを使い、津久井城を案内します。

出前授業

歴史解説専門員が小・中学校や高等学校・公民館などへの出前授業も行っています。劇団とタイアップするなどして津久井城を皆さんに分かりやすく伝

小中学生の参加による発掘



津久井城キャッスリング



研修棟での解説



えます。校外学習や遠足でも利用いただいています。

津久井城甲冑隊

6月25日は津久井城が落城した日です。この日は甲冑武者が城中(いや山中か?)を練り歩きます。展示室の鎧冑が見当たらないときは「出陣中」。各地の城祭りにも参陣しています。



津久井城甲冑隊

6. 津久井城と風景

山城と樹木

山城では、視界を遮り、防備の妨げとなるような場所の樹木は伐り払われていたというのが定説です。樹木があると登ってくる敵兵を見つけにくい上、大きな樹木の枝や幹は、大風が吹いた際には、建物や土塁などを壊したりします。また、繁茂した樹林は火攻めの要因にもなったと考えられます。

津久井城では……

1584年、津久井城の当番衆として派遣された山角定勝やまかどさだかつに宛てた城掟しろおきて（『津久井城番掟』）では「本草をとる者は城外に出ないと目的が適わないので通せ……」とあることから、現在よりもずっと樹木は少なかったと考えられます。しかし、炊事やかがり火などに枯草や薪・炭が使用されていたこと、山麓の荒久では、戦国時代までさかのぼる炭焼窯が見つまっていることから、城山は必ずしも丸坊主ではなく、場所によっては、少なからず樹木はあったと考えられます。

飯縄曲輪の大杉

飯縄曲輪の西側に根元が残る大杉は、樹齢900年と伝えられています。津久井城があった当時、既に樹齢400年の大木だったこととなります。戦国武将の信仰を集めた飯縄権現を祀った場

所にあることから、ご神木として大切にされていたと考えられます。根小屋諏訪神社にも樹齢500年を超える古木があります。

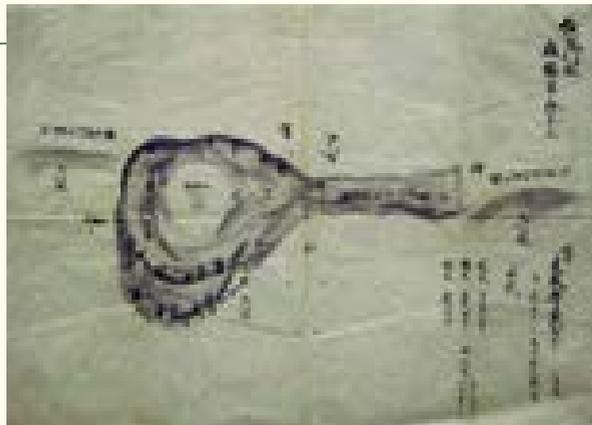
幕府の代官は、御林の状況を把握するため、名主に命じて、絵図（村絵図や御林絵図）や書上帳を提出させ、御林の面積、木の種類や本数を把握していました。

相模原市緑区二本松の角田家には、城山の御林絵図が多数残されており、そのうちの『城山御林飯縄宮絵図面』（作成年代不詳）には、「松木百六本



大杉／津久井城のシンボル大杉は、2013年8月12日、落雷により根元の5mを残し消失しました。

城山御林飯縄宮絵図面



榎木（もみ）九拾五本 杉木貳拾本
目通り壹尺五寸より八尺五寸まで」と記されています。この八尺五寸（地上から約1.2mの位置の幹周245cm）の大木とは、大杉のことではないでしょうか。

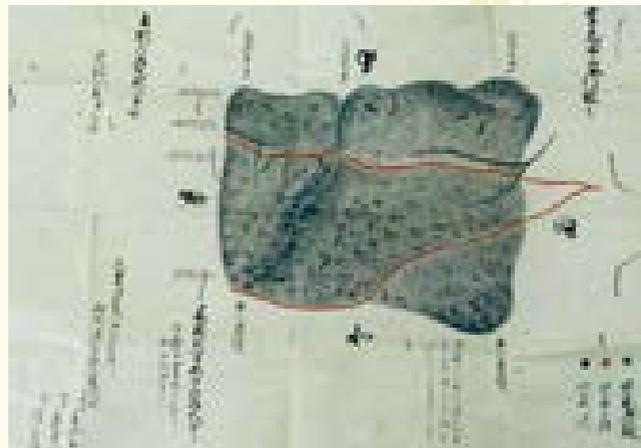
徳川家康と御林

徳川家康が関東入国の際、鷹狩りの途中に三増峠を見て「北条氏が武田信玄に三増合戦で敗れたのは、しっかりした林にしていなかったからだ。」と、雑木の植林を命じたそうです（『武徳編年集成』）。その真偽はわかりませんが、江戸時代に、三増峠から志田山にかけては、「御林」として幕府が管理する山林となりました。駿府から江戸に移った徳川家康は、江戸城の普請を進める一方で江戸の街の建設も急速に進めたため、建設資材や生活必需品として大量の木材や炭が必要となり、また、治水や治山のため、領国経営の基盤となる江戸周辺の山林を自らが手厚く管理することにしたものと考えられます。

津久井城も、小田原合戦による落城後、江戸時代初頭に幕府の体

制が定まったことによる根本にあった陣屋の廃止により、「城館」としての役割を完全に終え、全山に渡って植林がされたものと思われます。同時に、御林として幕府の管理下に置かれます。

当時の植林は、成長が早く、燃料として使用するマツや雑木が中心だったようで、幕末になって用材としても使用できるヒノキも植林されるようになりました。国道412号から見えるひとかたまりの針葉樹林は、幕末の代官、江川太郎左右衛門英龍の指導により植林された「江川ヒノキ」です。



志田山御林絵図 明治大学博物館所蔵

津久井城と眺望

相模川



武蔵野台地



山梨方面



三増峠・金原方面

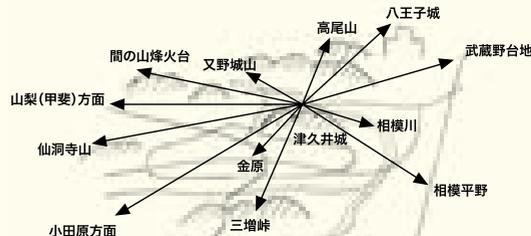


山頂から見渡す

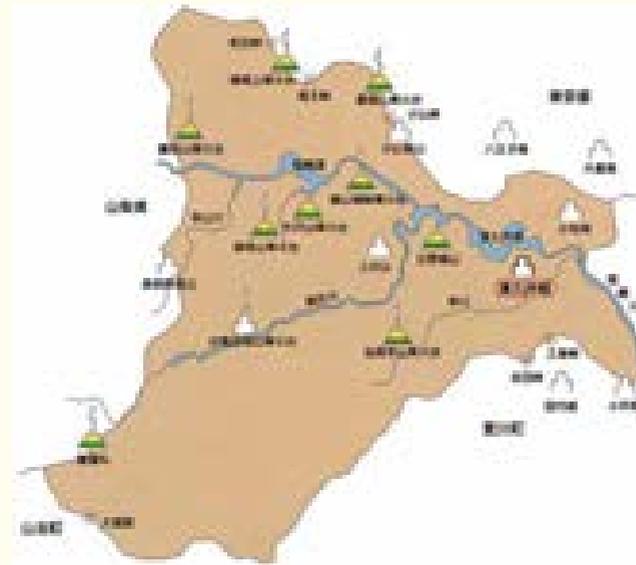
山城にとって、四方八方を見渡せること、敵を見つけやすいことは非常に重要なことでした。現在の稜線一帯は、樹木が茂り、見晴らしが効く場所には限られていますが、鷹射場やみはらしからは、相模平野から江の島、房総半島まで、もちろん横浜ランドマークタワーやベイブリッジも。土蔵からは武蔵野台地、東京スカイツリー、条件が良ければ遠く筑波山

を見ることもできます。

米曲輪からは金原・三増峠・八王



「見渡す」のイメージ図



子城・山梨方面を一望できます。

烽火ネットワーク

眺望を活かした伝達手段が烽火（狼煙とも書く）です。天気の良い時は、城や砦間の情報伝達に烽火や旗、吹流しなど、また夜間や雨の日には鐘や法螺貝などの「音」が使われました。津久井城にも飯縄曲輪に「烽火台・鐘撞堂」と呼ばれる曲輪があります。この場所は平野部である相模原方面に展望が開け、同じく烽火台があったとされる仙洞寺山方面も見ることから、烽火にはちょうど良い場所であったと考えられます。また津久井城を中心に烽火による連絡網が張り巡らされていました。特に西よりの地域に多いのは、甲斐武田氏への備えと考えられます。

烽火をあげる！

毎年、地域の有志の皆さんが烽火を上げています。狼煙筒を制作し、烽火台があったとされる山とで相互に確認できるかを実験したところ、あいのやましろのみね間山城峰烽火台（現在の相模湖プレジャーフォレスト）と津久井城との間では、煙を確認することができました。遠くは東

大和市から見えたという報告も届いています。

津久井城本城曲輪から



間の山烽火台付近から



シンボル津久井城＝親しまれる風景

城山を眺める

津久井城は、戦国の世には地域統治のシンボルとして、その偉容を誇り、人々は畏敬の念を持ち、城を見上げていたことでしょう。江戸時代の紀行文では挿絵として描かれ「城址」として名を馳せていたものと思われます。また、ぼうち唄や近隣の学校の校歌の歌詞になるなど、

心象風景としても心に刻まれています。

津久井城・城山の三つのこぶは、横浜ランドマークタワーや東京都庁の展望台からも見つけることができます。

また近年では津久井商工会の皆さんが津久井城シリーズとして、商品開発を行うなど、地域のシンボルとして親しまれています。

ランドマークタワーからの城山



津久井城を眺めてみました



橋本から



中野から



金原から

橋本から／丹沢山地の前に聳える城山は、かつて武田軍の関東進出をおさえたように、押し寄せる都市化の波をくい止めているかのようです。

金原から／天正18(1590)年、津久井城を包囲した軍勢は、ここからこの山容を見ていたに違いありません。

中野から／均整のとれた三角形のプロポーションは「中野富士」とも呼ばれるそうです。

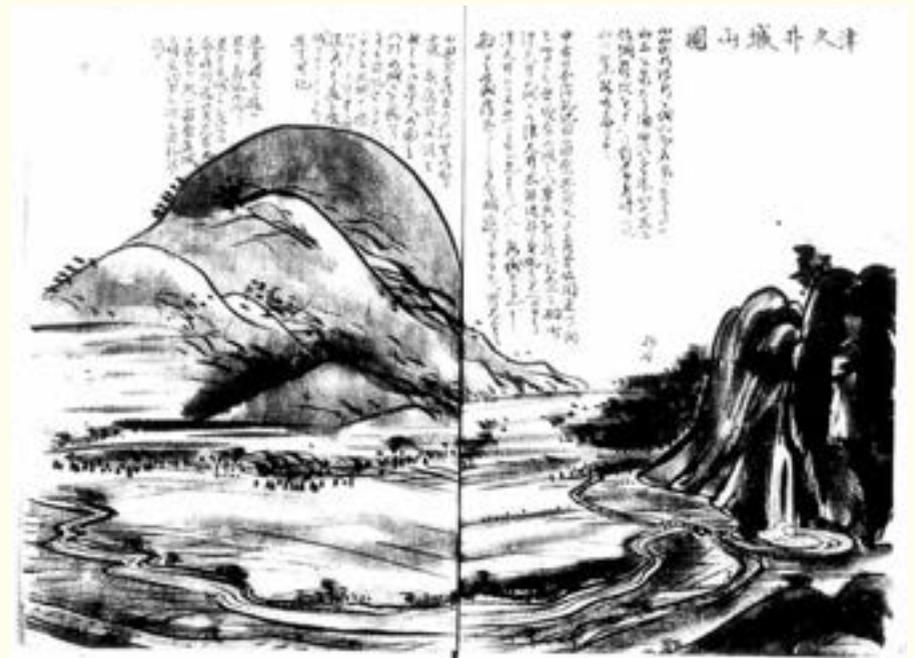
描かれた城山

『高尾山・石老山之記』

津久井城址は挿絵などにも登場します。竹村立義は、1827年8月に江戸から八王子・高尾山・石老山・そして津久井を旅して、甲州道中沿いの社寺や

地名の由来を考証した紀行文『高尾山・石老山之記』を記しています。そのなかで津久井城址の挿絵を残していますが、挿絵には、津久井城の歴史なども書き添えられています。

『高尾山・石老山之記』より 津久井城山図 国立国会図書館所蔵



上溝のぼうち唄

市域に継承される数少ない仕事唄で、クルリ棒と呼ばれる道具で麦や大豆、蕎麦などを脱穀する作業「ぼうち」の際に歌われていました。1番の歌詞に津久井城が登場します。

津久井の城が
おちたげな
弓と矢と小旗の
竿が流れるる
それそれ
粉んなれ
粉んなれ
粉んなれ

山城と水

宝ヶ池

津久井城の周りには相模川や申川などが流れていますが、いざ戦さとなり城に立てこもっても城中に水が無くては戦いどころではありません。津久井城には飯縄曲輪の東側に「宝ヶ池」と呼ばれる溜井があります。この池は、どの古絵図にも井戸として記されていますので、当時からあったものに違いありません。『新編相模国風土紀稿』には「日照りや雨が続いた年でも、いつも安定して水を湛えている」と記されています。まさに命の水だったのでしょう。

宝ヶ池



宝ヶ池は飯縄曲輪周辺に浸み込んだ雨が湧き出す谷地形の頂部に造られています。地元の古老の話によると「ずっと前に池をさらったことがあったが、底は緑色の一枚岩だった。」とのことでした。その岩で水が止まるように池を造ったものと考えられます。

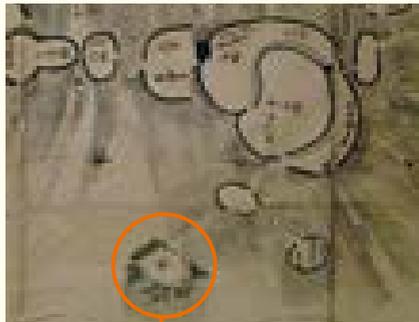
水源の木、伐るべからず

戦国期、越前朝倉氏の家臣窪田三郎兵が記したとされる城作りの手引書『築城記』は、山城を築くときの心得として、「水があることが大切、また水の手は遠くに作ってはならない」と記しています。また「水が枯れるので、やたらに尾根を掘ったり、むやみに大木を伐ったりしてはいけない」ともあります。水の大切さと水の確保に常に気を配っていたようです。

井戸の周囲には樹木が！

本城曲輪北側の小曲輪にも井戸と思われる痕跡が確認されています。やはり宝ヶ池と同じように谷部の頂部にあります。絵図をみると、井戸の周りには樹木が生い茂っているよう描かれています。この図面が軍学や築城法の講義に使われたとすると、これで「水と樹木の関係の大切さ」を教えていたのかもしれない。

『相州津久井古城』絵図(部分) 肥前島原松平文庫所蔵



水(井戸)の周囲には樹木が描かれています。

米曲輪の大甕

本城曲輪土塁の南側(米曲輪)で、常滑窯の大甕の破片が出土しています。戦国時代は領主と土地の農民とは結びつきが強く、農民も籠城することがあったようです。もしかしたら、山麓の農民が籠城して米曲輪に小屋掛けし、甕に水を溜めていたのかもしれません。

御屋敷の井戸跡

御屋敷では井戸の跡が見つかっています。また池と思われる遺構も出土していますので、水はふんだんに使えたものとも思われます。小網地区では、かつては城山に横井戸(横穴)を掘り使っていた家庭がありました。また尻久保

御屋敷井戸跡



御屋敷排水路遺構



御屋敷・池遺構



最近まで使われていた水源



川を隔てた東金原は水脈が乏しく、旧根小屋小学校では牢屋の沢から水を引き、上水として使用していました。

排水の工夫

山城にとっては「排水」にも気を配らなければなりません。「城」は、「土」で「成る」と書くように、土を突き固めて曲輪や土塁を築いています。したがって雨水を上手に流す工夫をする必要があります。そのため曲輪はやや傾斜をつけて造成し多くの排水路を設けています。また法肩の部分は雨にたたかれても崩れないよう石を敷き詰めている箇所もあります。

土地の履歴書

生業の痕跡

江戸時代の津久井では、代官による検地がたびたび行われました。津久井城の南西に位置する根小屋村の検地帳は、残念ながらほとんどが散逸してしまいました。残された検地帳から、山麓部が、茅場や畑となったことが伺え、時代を下るにつれ、土地利用にも変化が生じたものと考えられます。

1888年の地形図では城山周辺の平地のほぼ全てに桑畑の表記がされています。開国後の主力産業であった生糸の生産が、城山周辺でも盛んに行われていたことが伺え、養蚕が盛んであった津久井の歴史を語る資料ともなっています。

根小屋周遊園路脇のサワラ



城坂の桑の列植

ワサビ



地域の営み＝城山の風景

園内の樹林地をよく見てみると、大小連なる平場や長く伸びるくぼ地、石を寄せ集めた畝があちこちにみられます。また古道脇に残る炭焼き窯の跡、太さや種類の異なる樹林が混在している様子など、現代の我々の目に映るこれらの痕跡や景観、城山の風景は、地域の人々の営みの積み重ねが作り出し

た結果であり、戦国時代から現在に至る土地利用の変遷を物語っています。

その樹林に覆われた風景の中には、津久井城の遺構が埋もれています。長い時間の中で忘れられかけている事実を知り、それを読み解いていくことは、何とも面白いことです。

展望広場から眺める金原台地や丹沢山地、また周囲の山々に囲まれた風景

は、何とのどかな、ほっとする風景なのでしょう。津久井城をはじめとする地域の営みの歴史が醸し出された城山の風景を、未来に継承していくためには、城山だけではなく、城山を包み込む周囲の風景も大事にしていくことが大変重要であり、また、それに寄与していくことが、この公園の使命でもあります。

樹林内の地境の石積み



古道のたたずまい (牢屋の沢を渡る古道)

土塁と塹堀



7. 未来へ向けて

津久井城の整備を考える

津久井湖城山公園は、歴史や自然、風景に優れた特徴を持つ公園として「歴史と自然を活かす」「地域との連携」を目指して事業を進めてきた結果、年間50万人を超える皆さんにご利用頂いています。これまでは、城山の山麓部で園路や広場、パークセンターや駐車場、トイレなど、利用や管理のための施設を重点的に整備してきましたが、これらの施設も徐々に整ってきたことから、津久井城の重要な遺構がある山頂部での復元的整備についても検討を進めています。この整備は津久井城の構造や規模などを目に見える形で伝え、発信し、体感して頂くためのものです。

このガイドブックは、これからの津久井城の復元的整備に向けて、地域の皆さんと情報を共有し、一緒に考えて頂くためのものでもあります。

「公園をつくること」も「文化財を守ること」も、その目的は、その土地と人々の営みを「風景」や「文化財」という「財産」として捉え、その大切な財産を開発や過度な利用などから守り、次世代に引き継ぐことにあります。この大切な「財産」が失われないように土地を購入させていただき、保全や利用のための施設を整備し、法律による規制や適切な維持管理を行いながら、将来に渡ってそ

上段左から/研修棟、四季の広場 下段左から/剣先石積み、馬場東縦堀、本城曲輪虎口



の恵みを市民の皆さんに提供していくという根本的な部分で、何ら違いはありません。

地域や市民にとって、現代的な意義に沿った文化財(津久井城)の保全(保存)と活用とは何か、それを実現するためにはどうすればよいか、地域共有の財産を継続的に運用しながら地域や市民による歴史の継続性を保っていくためには、地域の伝統や文化を育む意識の醸成や具体的な取り組みを進めていかなければなりません。

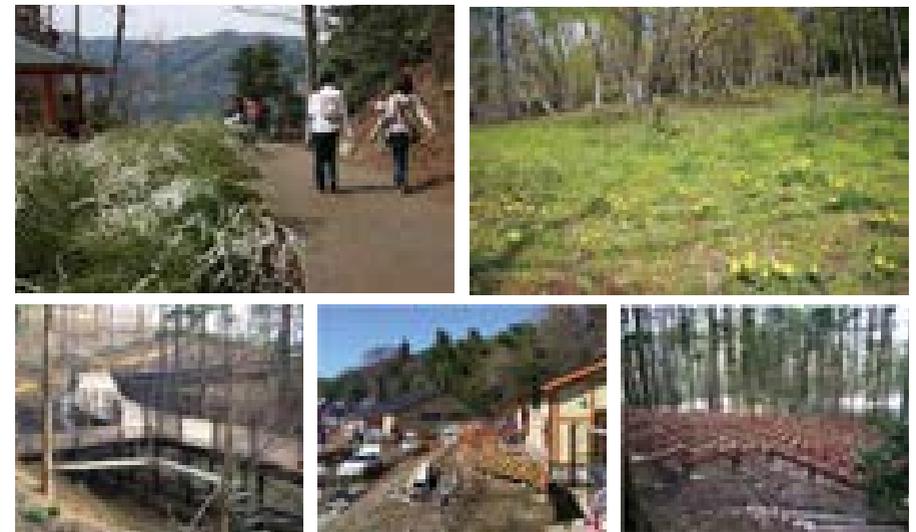
今、全国各地で城郭の復元整備など、地域の文化財の活用を目指した取り組みが盛んに行われています。どの事例も、関係者の熱い想いと試行錯誤を繰り返して実現されたことがよく伝わってきます。

そのような中で、公園として整備を進めようとしている津久井城には、文化財としての姿かたちだけではなく、訪れた人が「時間を楽しみ」、地域にとっては「地域社会の活性の源ともなる地域づくりの要素」を込めたいと思っています。

津久井城と地域

戦国時代から江戸時代にかけて、津久井城(城山)は、津久井領(津久井地域)の豊富な森林資源を運ぶ相模川の水運と甲斐や武蔵と相模を結ぶ街道の要所に位置し、一帯の支配や経営の拠点として機能してきたと考えられます。この津久井城の普請や管理には、同時期の山城に関する古文書にもあるように、多くの領民が動員されたと考えられます。そうして維持されてきた津久井城は、

上段左から/コイジ 展望広場、下段左から/デッキ園路、パークセンター付近、森のステージ工事



いざというときに領民を敵から守ってく
れる場所であり、地域の象徴的存在で
もあったと言えます。

このような津久井城を中心した地域
の生活史を知ることは、現代の私たち
が津久井地域の歴史や伝統文化を理解
し、継承していく上でとても大切なこと
です。そこで、パークセンターでは、津
久井城の解説とは別に「城山と地域と
の関わり」を解説テーマとして設け、ま
た、体験行事を通じ地域の文化財とし
ての津久井城や地域の歴史や成り立ち
などを紹介し、伝えていく取り組みを
行っています。

「共利共生」 共に育む公園づくり

公園づくりに当たっては、地域の歴史

を物語る文化財である津久井城と、地
域の暮らしを伝える城山の森の保全を
図りつつ、その恵みを市民の皆さんに
提供し、共有の財産として育てていく
こそが、この公園の大切な役割であ
ると考え取り組んできました。

この役割を果たすためには、この公
園が、様々な価値観を持つ多くの人た
ちの出会いと関わり場となり、多くの
皆さんと手を携えることが必要と考
えています。

「地域(利用者)」と「公園(津久井城)」
が共に手を携え、津久井湖城山公園(津
久井城)を共有の財産として育み、次
世代に伝えていく。私たちはそのための取
組みを「共利共生の公園づくり」と呼
んでいます。

願い

津久井湖城山公園には年間40万人を
超える皆さんに来園頂いていますが、
実は、地域の宝であるこの津久井城を
知らずに来園される方も多いのが実情
です。どのように「我らが津久井城」へ
目を向けて頂くか、地域の人たちにど
のように活かして頂くか、更なる工夫が必
要なのです。

このガイドブックを発刊し、山頂部
において「津久井城の復元的整備」のあり
方を模索することは、津久井城の存在
を広く発信することであり、共利共生の
公園づくりへの足がかりになると期待
しています。この取り組みを通じ、関係す
る皆さんの知恵を集め、考え、実践し、
文化財と公園、地域と公園のあり方の

モデルとなるような公園(津久井城)を
目指したいと思っています。

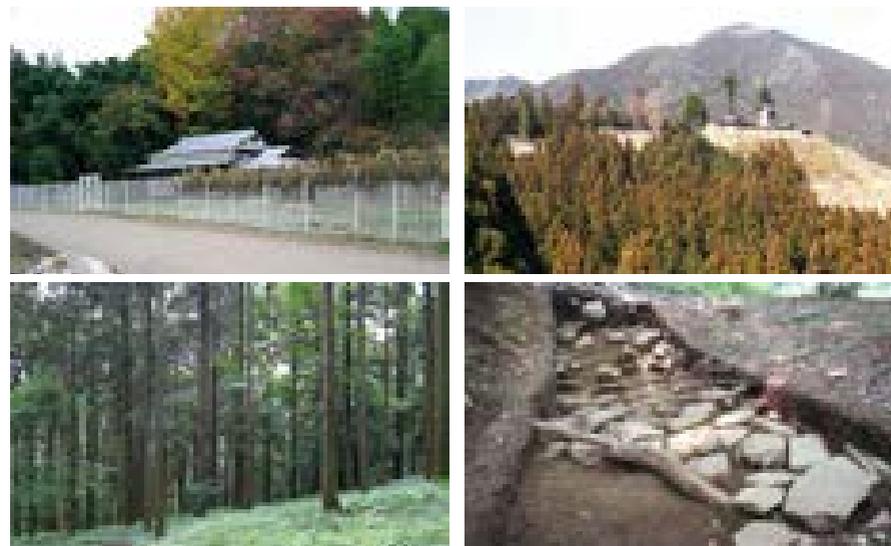
四季の広場では、天気の良い日には
たくさん子どもたちが遊具で遊んでい
ます。この小さな子どもたちは、そう遠
くない未来、牢屋の沢に架かる城坂橋
を渡り、この森を、城山を、我らが津
久井城を、見上げてくれるはずです。
周遊園路を散歩する皆さんが、この城
山をいくつしみ育むために助太刀して
くれることを待っています。

地域の象徴的存在であるこの津久井
城を次世代に引き継いでいくために「共
利共生の公園づくり」を進め、地域や市
民の皆さんと共にこの津久井湖城山公
園を育てていきたいと願っています。

上段左から/本城曲輪、土蔵 下段左から/八王子城(復元整備事例)、パークセンターと研修棟



上段左から/研修棟工事前、高根城(復元整備事例) 下段左から/植林地、本城曲輪石敷き通路



パークセンターの紹介

パークセンター



展示解説の様子



パークセンターは公園利用者の休息、案内・情報提供、また自然や歴史活動に関わる皆さんの活動拠点として2006年4月にオープンしました。

公園の利用案内の他、歴史や自然に関する展示・解説、調査の速報なども行っています。

公園をご利用の際は、まずパークセンターにお立ち寄りください。

【所在地】

〒252-0153 相模原市緑区根小屋162
電話042-780-2420

【駐車場利用時間】

8:00～19:00 (無料)

【開館時間】

9:00～17:00

【休館日】

第1・第3月曜日の午前中と年末年始

交通のご案内



■根小屋地区(パークセンター)へは

- ・橋本駅から三ヶ木行きバス25分「津久井湖観光センター前」下車
「湖畔展望園路」を通って徒歩20分
- ・橋本駅から新小倉橋経由三ヶ木行きバス25分「東金原」または「金原」
下車、徒歩15分

■水の苑地へは

- ・橋本駅から三ヶ木行きバス19分「城山高校前」下車、徒歩3分

■花の苑地へは

- ・橋本駅から三ヶ木行きバス20分「津久井湖観光センター前」下車、
徒歩1分



虎朱印(とらしゅいん)

戦国時代、小田原城を本拠とした伊勢宗瑞(北条早雲)の晩年、北条氏綱の代より使われはじめた北条宗家の印判。知行や寺社の規定、年貢など、領内の支配に関する文書発給に当たっては、この印判(虎朱印)を用いたとされます。

印文の「禄寿応穩(ろくじゅおうおん)」とは、「人民が平和であるように」という意味と言われ、北条氏の目指した関東の覇者としての領国統治の思想を表すとされています。

津久井城関連年表

	西 暦	元 号	記 事	
14 世紀	1323	元亨 3	執権北条貞時の供養のため円覚寺に法堂建造。建築材が「相模国奥三保屋形山」、「鳥屋山」から伐り出される。「奥三保」という地名の初見。	
15 世紀	1411	応永 14	真覚寺観音堂（八王子）棟札がこのころ長山忠好が津久井を所領すると伝える。「津久井」という地名の初見。	
	1476	文明 8	長尾景春の乱。	
	1478	文明 10	景春党を追って、太田道灌の手勢が奥三保に侵入する。	
16 世紀	1510	永正 7	景春・吉里一族が、津久井山に移り北条早雲に味方し上杉氏と戦う。	
	1524	大永 4	内藤大和入道、光明寺に菜園を寄贈。武田勢奥三保に侵入、小猿橋にて合戦を繰り返す。	
	1525	大永 5	武田信虎、北条氏綱との合戦。「津久井の城は未だ落ちず」とある。	
	1536	天文 5	武田勢青根郷に侵入、狼藉をはたらく。	
	1554	天文 23	相模・駿河・甲斐の三国同盟成立。	
	1559	永禄 2	北条氏康『小田原衆所領役帳』を作成する。	
	1569	永禄 12	武田信玄、小田原城を攻める。三増峠で北条氏照・氏邦を破る。古河公房足利義氏、小山秀綱に津久井城の普請を命じる。	
	1571	元亀 2	この頃、八王子城築城。	
	1582	天正 10	加藤丹後一手の夜襲。	
	1589	天正 17	豊臣秀吉、後北条氏討伐の軍令。	
	1590	天正 18	3月29日山中城落城。5月24日、内藤綱秀、津久井城普請のために三増ほか三カ村に人夫役を課す。 6月23日、八王子城落城。 6月25日、津久井城落城。即日、徳川家康の家臣、津久井城を請け取りに行く。 7月5日、北条氏直、豊臣秀吉に降伏。小田原城開城。 7月23日、徳川家康関東入国。	
	17 世紀	1608	慶長 13	守屋行広、代官任務（1627 寛永 4 年まで）。
		1644	正保元	守屋氏、駿河に支配替え。
1648		慶安元	7月1日『相州津久井古城図』描かれる。	
1664		寛文 4	陣屋一帯は畑地になる。（寛文の検地帳による）	
18 世紀				
19 世紀	1816	文化 13	『築井古城記』の原文作成される。	
20 世紀	1993	平成 5	城山一帯を公園とすることが計画決定（約 98.3ha）された。	
	1999	平成 11	県立津久井城山公園「水の苑地」「花の苑地」開園。	
21 世紀	2003	平成 15	「根小屋地区」一部開園。	
	2006	平成 18	「根小屋地区」にパークセンターがオープン。	

【主な参考文献】

『津久井町史 資料編 考古・古代・中世』 2007年 津久井町
『津久井町史 通史編 原始・古代・中世』 2016年 相模原市
『城山町史 資料編 考古・古代・中世』 1991年 城山町
『津久井城の調査1』 2003年 津久井城遺跡調査会・津久井町教育委員会
『津久井城の調査2』 2005年 津久井城遺跡調査会・津久井町教育委員会
『津久井城の調査3』 2009年 相模原市教育委員会
『かながわ考古学財団調査報告239,246,261 津久井城跡Ⅰ～Ⅲ』 2009～2011年 かながわ考古学財団
『かながわ考古学財団調査報告166 津久井城根小屋地区遺跡群』 2004年 かながわ考古学財団
『かながわ考古学財団調査報告249 津久井城跡馬込地区』 2010年 かながわ考古学財団
『津久井町郷土誌』 1986年 津久井町教育委員会
『築井古城記』 1980年 小川良一
『津久井城』 1998年 津久井土木事務所
『春林文化第3号 小松城とその時代を考える』 2008年 城山地域史研究会
『上杉氏のルーツ』 2011年 米沢市上杉博物館
『北条氏とその一族』 2007年 黒田基樹・新人物往來社
『戦国の城』 2005年 埼玉県立歴史資料館
『多摩の歩み 第139号 戦国大名北条氏』 2010年 たましん地域文化財団
『築井文化 第6号 津久井城跡考』 1978年 津久井郷土研究会
『城山風土記 第3号 九十歳の雑記帳』 1994年 城山町史編さん委員会
『城山風土記 第5号 町の歩みをふりかえる』 1996年 城山町史編さん委員会
『上野原町史 下』 1980年 上野原町史刊行委員会

【協力・提供】

資料協力 石井義兼・光明寺・角田信彰・八木輝・神奈川県厚木土木事務所津久井治水センター・神奈川県教育委員会・(公財)神奈川県公園協会・(公財)かながわ考古学財団・相模原市教育委員会・東海大学
執筆・編集 守屋浩之・神奈川県厚木土木事務所津久井治水センター・(公財)神奈川県公園協会・相模原市教育委員会・(株) LAU公共施設研究所
監 修 伊藤正義(鶴見大学)・井上泰(相模原市立博物館)・近藤英夫(東海大学)・津久井城の整備に関する特別専門会・県立津久井湖城山公園整備と遺跡に関する調整連絡会
イラスト 守屋浩之

(敬称略・50音順)
(制作協力：株式会社アスコット)



津久井城ブランド ロゴ

表紙に使ったロゴは、地域産業を掘り起こし地域の活性化を図ろうと、津久井商工会と地元商店とで協働開発しブランド化を進めている特産品「津久井城シリーズ」のものです。城山の三つの峰と、そばを流れる相模川・串川など3河川を家紋風に表現しています。

津久井城
TSUKUI CASTLE

津久井湖城山公園ガイドブック

津久井城ものがたり—過去から未来へ—

平成30年3月23日発行/公益財団法人 神奈川県公園協会

問合せ/県立津久井湖城山公園 パークセンター

相模原市緑区根小屋162

TEL.042-780-2420 FAX.042-780-2422

※本書作成に当たっては、神奈川県厚木土木事務所津久井治水センターから一部資料を提供していただいています。



頒布価格 600 円 (消費税込)
(公財) 神奈川県公園協会

